

田川市文化財調査報告書第11集

猫 迫 1 号 墳

福岡県田川市猫迫1号墳発掘調査報告書

2004

田川市教育委員会

田川市文化財調査報告書第11集

猫 迫 1 号 墳

福岡県田川市猫迫1号墳発掘調査報告書

2004

田川市教育委員会



石室(奥壁)



日貼り粘土付着状況



馬形埴輪



甲冑形埴輪 前面



甲冑形埴輪 後面

序

かつて田川市は、日本の近代化を支えた石炭産業の中心として栄えた都市でした。しかし、石炭産業以前の歴史についても、全国に誇る貴重な遺産が数多く所在しています。

今回報告する猫迫1号墳から出土した遺物もその一つです。平成11年度に実施した確認調査では様々な埴輪が出土していますが、中でも具体的な形状がわかる馬形埴輪・甲冑形埴輪については九州でも例がなく、また、日本列島でも初現期のものとして、美術工芸的な価値はもとより、学術的にも大きな意義をもつとして、大変注目されています。

田川が誇るこれらの貴重な歴史遺産が、今後の研究に活用されれば幸いに存じます。

発掘調査および本書作成にあたり、指導助言をいただきました方々、ご協力いただきました地元の皆様、作業に従事していただきました皆様に厚くお礼申し上げます。

平成16年3月

田川市教育委員会

教育長 月森清三郎

例 言

1. 本書は、平成11年度に田川市教育委員会が実施した猫迫1号墳確認調査に伴う発掘調査報告書である。
2. 猫迫1号墳確認調査については、平成11年度に報告書が刊行されているが（田代健二編2000『猫迫1号墳確認調査報告書』田川市文化財調査報告書第10集 田川市教育委員会）、遺構のみの概要報告であったので、本書で改めて調査の報告を行う。
3. 本書に掲載した遺構実測図は、田代健二、秦 憲二（福岡県教育委員会）が作成した。
4. 本書に掲載した遺物実測図は、田代、福本 寛、森本美千代、中川恭子が、製図は中川が行った。なお、石器については杉原敏之氏（福岡県教育庁筑豊教育事務所）にお願いした。
5. 本書に掲載した遺構写真は田代が、遺物は福本が撮影した。
6. 遺物の整理は、岩瀬正信氏指導のもと、池田藤香、大木千恵子、中前良子、森本が行った。なお、馬形埴輪、甲冑形埴輪については、九州歴史資料館に復元を一部お願いした。
7. 出土遺物、写真、実測図は全て田川市石炭資料館で保管している。
8. 本書で用いる遺構図の方位は全て磁北である。
9. 本書のうち、第3章第4節の執筆を杉原敏之氏にお願いした。他の部分の執筆と本書の編集は、福本が行った。

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査の経過と調査体制	1
第2節 位置と環境	3
第2章 調査の記録	8
第1節 調査前の状況および調査の方法	8
第2節 遺構	1
第3節 遺物	11
第3章 考察	41
第1節 円筒埴輪	41
第2節 形象埴輪	4
第3節 田川地域における古墳時代中期の様相	41
第4節 田川地域の旧石器文化	41
第4章 まとめ	41

図版目次

巻頭図版1	石室(奥壁) 目貼り粘土付着状況
巻頭図版2	馬形埴輪
巻頭図版3	甲冑形埴輪 前面 甲冑形埴輪 後面
図版1	猫追1号墳遠景・猫追1号墳全景
図版2	墳丘(調査前)・天井石(調査前)・北側周溝土層断面 南突出部埴輪出土地点・南東突出部(北から)・南突出部(西から)
図版3	周溝完掘状況(北側)・北トレンチ周溝検出状況・南トレンチ墳丘部 北トレンチ遺構検出状況・石室前庭部土層横断面・石室前庭部土層縦断面
図版4	石室左側壁・石室左奥隅・石室右側壁
図版5	石室玄門部・石室玄門階段状部・石室床面
図版6	閉塞石・羨道部右側壁・天井石復元状況
図版7	形象埴輪出土状況・馬形埴輪出土状況・甲冑形埴輪出土状況
図版8	円筒埴輪①
図版9	円筒埴輪②
図版10	朝顔形埴輪・蓋形埴輪
図版11	家形埴輪・線刻のある埴輪
図版12	線刻・透孔のある埴輪・円筒埴輪
図版13	形象埴輪
図版14	馬形埴輪馬具・甲冑形埴輪ベルト
図版15	須恵器①

- Ⅱ 版16 須恵器②
Ⅱ 版17 土師器・鉄器
Ⅱ 版18 石器・その他

挿 図 目 次

第1図	調査地周辺遺跡分布図 (1/50,000)	7
第2図	調査地位置図 (1/5,000)	8
第3図	調査前墳丘測量図 (1/250)	9
第4図	調査後墳丘測量図 (1/250)	10
第5図	南北トレンチ土層図 (1/60)	12
第6図	各トレンチ土層図 (1/60)	13
第7図	南突出部埴輪出土状況図 (1/20)	14
第8図	石室実測図 (1/60)	15
第9図	石室天井石実測図 (1/60)	16
第10図	その他の遺構 (1/60)	17
第11図	円筒埴輪実測図① (1/4)	19
第12図	円筒埴輪実測図② (1/4)	20
第13図	円筒埴輪実測図③ (1/4)	21
第14図	円筒埴輪実測図④ (1/4)	22
第15図	朝顔形埴輪実測図 (1/4)	24
第16図	盞形埴輪・家形埴輪実測図 (1/4)	25
第17図	線刻・透孔のある埴輪実測図 (1/3)	26
第18図	形象埴輪実測図 (1～4は1/3、他は1/4)	28
第19図	馬形埴輪実測図 (1/6)	29
第20図	馬形埴輪馬具実測図 (1は1/4、他は1/3)	30
第21図	甲冑形埴輪実測図 (1は1/6、2は1/3)	32
第22図	須恵器・土師器実測図 (1～7は1/4、他は1/3)	33
第23図	鉄器実測図 (1/2)	34
第24図	出土採集遺物実測図 (1は1/3、他は2/3)	35
第25図	田川地域の旧石器資料実測図 (2/3)	46

表 目 次

第1表	円筒埴輪観察表	36
第2表	朝顔形埴輪観察表	37
第3表	形象埴輪観察表	38
第4表	土器観察表	39
第5表	猫追1号墳・セスドノ古墳の比較	43

第1章 はじめに

第1節 調査の経過と調査体制

猫迫1号墳は、県文化課が1977年に刊行した「福岡県遺跡等分布地図（田川市・田川郡編）」に記載があり、主体部の石室が露出した状態で以前から知られていた。しかしながら、墳丘部分は深い藪で覆われ、墳丘形態等は明らかではなかった。

平成8年に土地管理者により藪が伐採され、かなり大型の墳丘が露出した。墳丘周囲では円筒埴輪片が採集されるなど、セスドノ古墳に連なる首長墓である可能性が考えられ、市教育委員会では古墳の重要性を認識し、国庫補助事業の重要遺跡確認調査として猫迫1号墳の調査を計画した。土地所有者と交渉したところ承諾していただいたので、平成11年度に調査を実施することになった。

現地調査は平成11年7月21日より開始して規模・石室構造等を確認し、9月14日に一旦終了した。この間、9月4日に現地説明会を行い、約100名の参加者を得た。

その後、県文化財保護課と協議した結果、遺跡の重要性からみてさらに多くの情報が必要であるとの結論に達した。県文化財保護課のご尽力により、国・県からの追加補助を得られることになって、墳丘周囲および石室前庭部墓道部分の補足調査を行った。補足調査にあたっては、県文化財保護課より秦憲二主任技師を派遣していただき、調査にあたっていただいた。補足調査は平成11年10月18日から開始し、石室前庭側壁および墳丘突出部の検出、形象埴輪の出土などの成果を得て11月25日に終了した。古墳は調査後埋め戻して現状に戻している。

猫迫1号墳出土遺物については、墳丘南側突出部の基部から馬形埴輪と甲冑形埴輪がまとめて出土しており、国内でも初現期のものとして注目されていた。両者の復元については九州歴史資料館にお願いしていたが、その他の遺物については、平成14年6月～11月に福岡県緊急地域雇用創出特別基金事業補助事業により有限会社文化財テクノアシストに遺物整理を委託した。平成14年度の秋には田川市石炭資料館において、復元が終わった馬形埴輪・甲冑形埴輪を中心に、福岡県下の主要な埴輪を展示した企画展「埴輪は語る」が開催され、猫迫1号墳出土埴輪が紹介されることとなった。

平成11年度の概要報告では紹介が間に合わなかった出土遺物も整理がある程度終了し、平成15年度に調査報告書が刊行されることになった。なお、発掘調査及び報告書作成にかかる調査体制は次のとおりである。

総 括 田川市教育委員会

教 育 長 月森浩三郎

教育部長 圖 師 利 雄（平成11～12年度）

越 知 作 光（平成13～14年度）

中 村 輝 昭（平成15年度）

田川市教育委員会文化課

課 長 新 具 重 信（平成11年度・15年度）

久 原 秋 男（平成12～14年度）

	課長補佐	林 晋
田川市教育委員会文化課石炭資料館	館 長	佐々木哲哉
	係 長	北川由美子 (平成11年度)
		身 吉 泰 子 (平成12～13年度)
		森 本 弘 行 (平成14～15年度)
	主 任	森 本 弘 行 (平成11～13年度)
		福 岡 邦 子 (平成14年度)
調査担当	主 事	田 代 健 二 (平成11～12年度)
		坂 本 明 美 (平成15年度)
整理担当		福 本 寛 (平成13年度～)

調査指導	福岡県教育庁総務部文化財保護課	主任技師	秦 憲 二 (調査担当)
	福岡県教育庁筑豊教育事務所	主任技師	小 川 泰 樹 (平成11～12年度)
		主任技師	杉 原 敏 之 (平成13～15年度)

発掘調査及び整理作業に従事していただいた方々

池田静香、衛藤妙子、大木千恵子、岡田裕子、小野宮子、河野深雪、北崎 優、中川恭子、中藤
 哲生、中前良子、中村正己、中村陽典、野畑里美、長谷川清隆、兵頭 晃、三苫孝一、森本美千代
 (五十音順、敬称略)

なお、発掘調査及び報告書作成については、筑豊教育事務所管内市町村文化財担当者をはじめと
 して、多くの方々からご指導ご協力をいただきました。以下にお名前を記し、感謝の意を表します。
 (敬称略)

小田富士雄 (福岡大学)、亀田修一 (岡山理科大学)、高橋克壽 (奈良文化財研究所)、千賀 久
 (榎原考古学研究所)、土生田純之 (専修大学)、岡田裕之 (九州大学)、石山 勲、兄玉真一、重藤
 輝行、岸本 圭 (福岡県教育委員会)、牛嶋英俊 (福岡県文化財保護指導委員)、田村 悟 (直方市
 教育委員会)、尾岡 晃 (桂川町教育委員会)、古後憲浩 (鞍手町教育委員会)、野村憲一 (香春町教
 育委員会)、井上勇也 (方城町教育委員会)、岩瀬正信、壇 力 (文化財テクノアシスト)、吉原龍雄、
 川崎瑞彦、植木 忠、田川地域文化財ボランティアの会

第2節 位置と環境

猫追1号墳は田川市大字伊田3838番地に所在する。

田川地域は福岡県北部のほぼ中心に位置し、三方を山地に囲まれた盆地である。北東部と南部は福智山地、英彦山といった険しい山々に隔てられているが、隣接する嘉穂盆地、京都平野とは烏尾峠、猪熊峠、仲哀峠により結ばれている。北西へは福岡県第二の河川であり、弥生文化研究の端緒となった遠賀川によって直方・鞍手地域と結ばれている。田川地域は遠賀川上流に位置しており、その支流である彦山川、中元寺川が盆地を貫流する。また彦山川に金辺川が、中元寺川には泓川が注いでおり、加えて、周防灘に注ぐ今川上流域の一部も含めて、田川地域の水系となる。彦山川、中元寺川、金辺川は沖積地を形成しているが、特に彦山川と中元寺川に挟まれた低丘陵地には古第三紀層が形成されており、田川地域的主幹産業であった石炭産業の要因となった。なお、嘉穂地域と隔てる船尾山、福智山地南端の香春岳に分布している石灰層は、石炭産業と並ぶ主要鉱業であるセメント鉱業を発展させた。銅をも産出する鉱物の山・香春岳については、英彦山とともに田川の「ヤマ」の文化を育んだ象徴として、圧倒的な存在感がある。

今回報告する猫追1号墳は、以上のような地理的環境をもつ田川地域において、沖積平野部を広く見渡せる彦山川東岸の標高約45mの低丘陵上に所在する。

田川地域における人々の生活の痕跡は、猫追1号墳採集の翼状剥片、田川市竊採集のナイフ形石器¹⁴⁾から後期旧石器時代に通る。細石器についても香春町湯無田遺跡¹⁵⁾で出土しており、これまで不明瞭であった旧石器時代の様相も次第に明らかとなってきている。続く縄文時代でも近年重要な事例が増加しているが、特に田川盆地の奥地である今川上流域・英彦山山麓での調査成果は著しい。縄文時代早期～前期では、追い込み猟の遺構が検出された添田町下井遺跡¹⁶⁾、曾畑式・轟式土器が採集された添田町ズイベガ原遺跡¹⁷⁾をはじめ、赤村合田遺跡¹⁸⁾では、竈ノ神式の石組炉が検出されている。中期における福岡県内の資料は少ないが、香春町湯無田遺跡では船元Ⅱ式の土器片が出土している。縄文時代後期～晩期になると北部九州では遺跡が増加するが、田川地域でも川崎町原遺跡¹⁹⁾で鏡ヶ崎式が、香春町五徳畑ヶ田遺跡²⁰⁾では広田Ⅰ・Ⅱ式を中心とする土器が出土している。集落については、添田町榊田遺跡²¹⁾で後期前半の石囲炉を持つ住居跡が検出されており、合田遺跡などでも住居跡が検出されている。川崎町冥加塚遺跡²²⁾では晩期前半の埋土遺構が検出されている。また、五徳畑ヶ田遺跡や榊田遺跡では土偶と考えられる土製品も出土しており、周防灘沿岸部との関連が推測される。

弥生時代に朝鮮半島からもたらされた稲作文化は、遠賀川上流の田川地域においても程なく受容された。弥生時代前期前半の資料はそれほど多くないものの、合田遺跡における「松菊里」型住居の存在は、新文化受容の足跡を残す。最近では赤池町で支石墓の存在も指摘されており²³⁾、今後に期待が大きい。弥生時代前期後半(末)～中期前半にかけて遺跡は爆発的に増加する。集落としては五徳畑ヶ田遺跡や田川市下伊田遺跡²⁴⁾が核となり、展開する。なお、下伊田遺跡は弥生時代前期土器の下伊田式土器として早くから学会に紹介された遺跡として著名である²⁵⁾。この時期における田川地域の土器は糸田町松ヶ迫遺跡²⁶⁾においてまとまって出土しており、前期末では周防灘沿岸部の影響を受けるが、中期になると須玖式の影響を受けるとされている。各地の影響を受けながら成立する田川地域の土器ではあるが、その中でも地域的小様式とも言うべき特徴を示しているようである²⁷⁾。

石器の動向からみても田川地域内で完結した生産活動が想定でき、これまで埋没していた感がある田川地域の主体性が徐々に明らかになりつつある¹¹⁸⁾。

中期前半から、弥生文化を特徴づける青銅器が田川地域でも出現する。田川市寺ノ上遺跡、同市夫婦塚遺跡、大任町柿原遺跡では細形銅剣が確認されている¹¹⁹⁾。また、添田町庄原遺跡¹²⁰⁾では、銅鐙鋳型が出土しており、比較的早い段階から田川地域でも青銅製品が生産されていたようである。司遺跡では金属溶解炉も検出されており、金属製品の生産を考える上で重要である。中期後半では、糸田町古賀ノ峯遺跡、岡町宮山遺跡で銅戈の集中埋納がみられ¹²¹⁾、後期では、香春町宮原遺跡の箱式石棺から出土した面径19.5cmに及ぶ田川地域最大の内行花文鏡¹²²⁾などの鏡が副葬される墓も出現する。その他、下伊田遺跡出土の銅製鋤先が知られている。

弥生時代における墓制については、大型壺棺が方城町宝珠遺跡と糸田町糸田原遺跡で単発的に散在するものの¹²³⁾、遠賀川以東の状況と同様、小児棺もしくは箱式石棺の割合が高い。川崎町公門原遺跡¹²⁴⁾では、終末期～古墳時代初頭の高杯を8個供献した箱式石棺墓が検出されているが、これは、田川市西部に出現する次世代の前方後円墳の主体部に受け継がれていく。

田川市位登古墳は古墳時代前期の前方後円墳と考えられており、中元寺川にのびる低丘陵上に位置している。平成13年度に実施された主体部の調査では、朱塗りの箱式石棺から人骨が検出されている¹²⁵⁾。また、弥生時代終末～古墳時代前期の集落としては合田遺跡が著名で、布留式古段階を中心とした畿内系の土器や山陰系の鼓形器台などの外来系土器が多く出土している。なお、川崎町田原遺跡では、九州でも頻例が少ない手すり形土器が完形で出土している。

古墳時代中期における田川地域の首長墓系列は、彦山川東岸の低丘陵上に移る。今回報告する猫迫1号墳に、セスドノ古墳¹²⁶⁾が続く。猫迫1号墳の馬形埴輪や初期須恵器、セスドノ古墳の馬具・短甲、陶質土器小壺、垂飾付耳飾など、両者とも渡来文化を色濃く反映した古墳である。これらの特異な初期横穴式石室には韓国大邱地域の影響が指摘されており¹²⁷⁾、田川地域のみならず、日本列島に渡来文化が波及した過程を考える上で重要な資料となっている。なお、主体部は不明だが、香春町長畑1号墳でも金製垂飾付耳飾が発見されている¹²⁸⁾。

6世紀に入ると群集墳が形成され始める。田川地域の後期群集墳は、彦山川流域に発達した古第三紀層の砂岩層に横穴墓が数多く築造されている。田川地域最大の横穴墓群である田川市経塚横穴墓群¹²⁹⁾をはじめ、馬具・武具を副葬した田川市伊田狐塚横穴群¹³⁰⁾、墳丘を持つ横穴墓群である田川市長谷池横穴墓群¹³¹⁾や、横穴墓が前方後円墳の主体部と考えられる大任町狐塚横穴墓群¹³²⁾など、横穴墓の被葬者像に迫れる資料が多い。そして、田川市の夏吉地区丘陵には、40数基の石室墳で構成される夏吉古墳群がある¹³³⁾。夏吉古墳群は6世紀前半頃の9号墳から築造が開始され、7世紀まで脈々と続く。群中、1号墳は石棚をもち、また三累頭頸頭を出土した21号墳は、田川地域でも最大級の巨古墳である。なお、金田町人見古墳群より、獅頭頸頭柄頭が出土している¹³⁴⁾。当該時期の石室墳は夏吉古墳群のように群集するものから、大任町建徳寺古墳¹³⁵⁾、川崎町戸山原古墳¹³⁶⁾、糸田町松ヶ迫2号墳¹³⁷⁾などのように単独して立地するものがある。中でも方城町伊方古墳は、夏吉21号墳と同等以上の規模を持つ三室的な横穴式石室である¹³⁸⁾。古墳時代の集落は事例が少ないものの、香春町五徳畑々田遺跡、川崎町永井遺跡¹³⁹⁾などで調査が行われている。

このような群集墳の形成も、7世紀中ごろ過ぎると築造が縮小していく。かわって、仏教を中心とした新しい律令時代へと変革を迎えるようになる。田川地域は豊前国に編入されたが、『豊前国

『風土記』には、「新羅国神」が香春に住みつき「鹿春の神」となった記載が登場し、9世紀代には『三代実録』や『類従三大格』などに、香春三ノ岳の銅採掘の記録もみられる。このように、以降、田川地域の文化の中心は、香春岳周辺に移っていくようである。豊前と大宰府を結ぶ官道も整備され、官道沿いには流麗な新羅瓦を出土した田川市天台寺跡⁽⁷⁾が位置している。最近の調査では天台寺跡と同時期的大型掘立柱建物香春町浦松遺跡⁽⁸⁾で検出され、律令成立期前後の様相が明らかになりつつある。

田川地域は「遠賀川流域」、「豊前」、「筑豊」と、時代によって所屬が異なってきた。このことは反面、各文化の交差点であった田川の地域的特色を表現している。そしてこれらの交流は周辺地域に留まらず、遠く朝鮮半島にまで目が向けられる。様々な文化が交錯する状況の中で見え隠れする田川地域の主体性を、今後明らかにしていくことが課題といえよう。

【註】

- (1) 高橋 慎：2002「田川地域の旧石器時代資料」『福岡考古』20号
- (2) 杉原敏之編 2003『湯無田遺跡』福岡県文化財調査報告書第180集 福岡県教育委員会
- (3) 『平成15年度筑豊教育事務所管内文化財指導者講習会』資料
- (4) 田川市史編纂委員会 1974『田川市史』上巻
- (5) 井上裕弘編 1985『合田遺跡』赤村文化財調査報告書第1集 赤村教育委員会
- (6) 川崎町史編纂委員会 2001『川崎町史』上巻
- (7) 野村憲一編 2001『五徳畑ヶ田遺跡(概報)』香春町文化財調査報告書第11集 香春町教育委員会
2002『五徳畑ヶ田遺跡Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区(概報)』
香春町文化財調査報告書第13集 香春町教育委員会
- (8) 『平成14年度筑豊教育事務所管内文化財指導者講習会』資料
- (9) 川述昭人・伊崎俊秋・飛野博文編 1987『更加塚遺跡』
福岡県文化財調査報告書第77集 福岡県教育委員会
- (10) 小林省吾 2001『赤池町の遺跡・遺物(1)』『福岡考古』19号
- (11) 上野智裕編 1988『ト伊田遺跡群』田川市文化財調査報告書第4集 田川市教育委員会
- (12) 森貞次郎 1942『古跡弥生式文化に於ける立岩文化期の意義』『古代文化』13-7
- (13) 新原正典編 1980『松ヶ迫遺跡』糸田町文化財調査報告書第1集 糸田町教育委員会
- (14) 野村憲一・福本 寛・松浦幸一・八木健一郎・杉原敏之 2003『田川地域における弥生文化の動向』
『九州考古学』78号
- (15) 前掲(14)
- (16) 寺ノ上遺跡・夫婦塚遺跡：前掲(4)
柿原遺跡：橋口達也編 1976『狐塚古墳群』大任町文化財調査報告書第1集 大任町教育委員会
- (17) 岩本敦之編 1997『庄原遺跡Ⅰ』添田町埋蔵文化財調査報告書第4集 添田町教育委員会
- (18) 岩熊真実編 1998『宮山遺跡』糸田町文化財調査報告書第3集 糸田町教育委員会
- (19) 原口信行 1954『箱式石棺内出土の内行花文鏡』『考古学雑誌』40-3、など
- (20) 福岡市博物館 1998『弥生人のタイムカプセル』平成10年度福岡市博物館特別企画展示図録

- (21) 新原正典編 1993『公門遺跡 真崎遺跡』川崎町文化財調査報告書第3集 川崎町教育委員会
 (22) 福本 寛 2002「位登古墳の調査」『九前研通信』11号 九州前方後川墳研究会
 (23) 佐田 茂編 1984『セストノ古墳』田川市文化財調査報告書第3集 田川市教育委員会
 (24) 森下浩行 1987「九州型初横穴式石室考-畿内型出現以前横穴式石室の様相-」『古代学研究』115
 (25) 野村憲一・水ノ江和同編 1998「長畑遺跡 宮原遺跡 小倉古墳 才立横穴墓」

香春町文化財調査報告書第10集 香春町教育委員会

- (26) 田代健二編 1999『経塚横穴墓群・古墳群』田川市文化財調査報告書第9集 田川市教育委員会
 (27) 柳田康雄編 1983「夏吉古墳群・清瀬横穴群・伊田狐塚横穴群」

田川市文化財調査報告書第2集 田川市教育委員会

- (28) 田代健二編 1993「長谷池遺跡群」田川市文化財調査報告書第8集 田川市教育委員会
 (29) 前掲 (16) の「狐塚古墳群」にて
 (30) 夏吉古墳群については、小方泰宏氏の一連の研究がある。

(小方泰宏 1987「夏吉古墳群の歴史的位置」『郷土田川』30号 田川郷土研究会、など)

- (31) 金田町教育委員会編 1999「金田町誌」
 (32) 緒方 泉編 1994「建徳寺古墳」大任町文化財調査報告書第4集 大任町教育委員会
 (33) 前掲 (6)
 (34) 伊崎俊秋編 1982「松ヶ迫2号墳」糸田町文化財調査報告書第2集 糸田町教育委員会
 (35) 水ノ江和同編 1998「伊方古墳・野添遺跡群・方城岩屋崖梵字曼荼羅」

方城町文化財調査報告書第5集 方城町教育委員会

- (36) 井上裕弘編 1985「永井遺跡」川崎町文化財調査報告書第1集 川崎町教育委員会
 (37) 横田賢次郎編 1990「天台寺跡（上伊田廃寺）」

田川市文化財調査報告書第6集 田川市教育委員会

- (38) 前掲 (3)

1. 迫古墳、2. 迫横穴墓群、3. 迫遺跡、4. 宝珠遺跡、5. 草場遺跡、6. 三木松古墳、7. 人見古墳群、8. 神崎遺跡、9. 瀬上井古墳、10. 城山古墳群、11. 玉塚山古墳、12. 後谷遺跡、13. 伊方古墳、14. 長谷池古墳群、15. 野添横穴墓群、16. 高崎古墳、17. 伊方遺跡、18. 大星遺跡、19. 法華堂遺跡、20. 前村遺跡、21. 大穴遺跡、22. 清瀬横穴墓群、23. 夏吉古墳群、24. 夏吉1号墳、25. 夏吉21号墳、26. 若八腰古墳群、横穴墓群、27. クラタ山古墳、28. ノ島古墳、29. 香春市城、30. 香春再二ノ谷遺跡、31. マン洞、32. 長根遺跡、33. 宮原遺跡、34. 河内三三（後宮跡考地）、35. 中津原横穴墓群（才立横穴墓）、36. 一本松古墳群、37. 松ヶ迫古墳群、38. 狭ヶ丘横穴墓群、39. 狭ヶ丘遺跡、40. セストノ古墳、41. 壺迫1号墳、42. 壺迫2号墳、43. 元月遺跡、44. 九州商業高校校舎遺跡、45. 大塚横穴墓群、46. 香春寺遺跡、47. 蔵ヶ原古墳群、横穴墓群、48. 伊山遺跡群、49. 水島古墳、50. 堀木横穴墓群、51. 上吉田古墳群、52. 上吉田横穴墓群、53. 升ノ原遺跡、54. 山伏塚、55. 上の原古墳群、56. 上の原遺跡群、57. 小塚横穴墓群、58. 小ノ上遺跡群、59. 寺の裏遺跡、60. 天神寺遺跡、61. 天神山古墳群、62. 松ノ木田遺跡、63. 水鏡遺跡、64. 門出遺跡、65. 下ノ田遺跡、66. 倉岡遺跡、67. 長谷池遺跡群、68. 陽台山古墳群、69. 和山古墳群、70. 和田横穴墓群、71. 糸田遺跡、72. 城山遺跡、73. 河内遺跡、74. 宮山古墳群、75. 田面遺跡、76. 糸田城跡、77. 松ヶ迫1号墳、78. 松ヶ迫2号墳、79. 松ヶ迫遺跡、80. 洲ヶ崎古墳、81. 古賀ノ平遺跡、82. 原遺跡、83. 堤下古墳群、84. 上糸田遺跡、85. 高木公園古墳、86. 窪田古墳群、87. 岩ノ敷古墳、88. 香春町古墳、89. 岩屋古墳、90. 見立古墳、91. 見立古墳、92. 見立古墳、93. 角原古墳群、94. 角原遺跡、95. 角原原A遺跡、96. 角原原B遺跡、97. 角原原C遺跡、98. 貴者嶺神社古墳群、99. 見立遺跡、100. 法光寺遺跡、101. 法光寺遺跡、102. 法光寺遺跡、103. 人形横穴墓群、大坂古墳、104. 長瀬横穴墓群、105. 成道寺石棺墓群A群、106. 成道寺公園内1号墳、107. 成道寺石棺墓群B群、108. 神岡山古墳、109. 成道寺公園横穴墓群、110. 横木遺跡、111. 天台寺跡（上伊田廃寺）、112. 天台寺瓦遺跡、113. 伊田狐塚横穴墓群、114. 上伊田横穴墓群、115. 香春横穴墓群、香春古墳、116. 小見瀬山古墳、117. 大下横穴墓群、伊加利1号墳、118. 伊加利2号墳、119. 伊加利3号墳、120. 城山第1地点、121. 城山第2地点、122. 岩屋八層横穴墓群、伊加利4号墳、123. 伊加利5号墳、6号墳、124. 田中横穴墓群、古墳群、125. 六角堂横穴墓群、126. 伊加利9号墳、127. 岡山横穴墓群、岡山古墳、128. 清瀬山横穴墓群、129. 明神山横穴墓群、130. 建徳寺古墳群、131. 松ノ越横穴墓群、132. 柿原横穴墓群、133. 蓮手横穴墓群、134. 狐塚横穴墓群、古墳群、135. 丸山古墳、136. 田山横穴墓群、137. 新荷山横穴墓群、138. 安水横穴墓群、139. 大行寺横穴墓群、140. 分區部遺跡、141. 進木谷城、142. 大三新神社横穴墓群、143. 野上放布遺、144. 上野田古墳群、145. 古賀古墳群、146. 下位寺遺跡、147. 位登古墳、148. 位登横穴墓群、149. 岩井古墳、150. 戸原遺跡、151. 公門遺跡、152. 高加原遺跡、153. 徳位古墳群、154. 石鏡池古墳群、155. 田原古墳群、156. 藤原原遺跡、157. 黒位全2号墳、158. 金岡城跡、159. 永井遺跡、160. 角田山1号墳、161. 経塚横穴墓群、古墳群



第1図 調査地周辺遺跡分布図 (1/50,000) [国土地理院「田川」(行清)より]

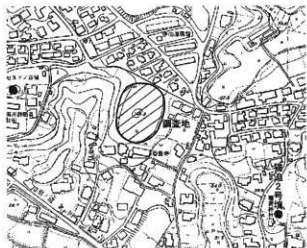
第2章 調査の記録

第1節 調査前の状況および調査の方法

1) 調査前の状況

猪迫1号墳の墳丘は後世の擾乱が著しく、全体的に大きく改変されていた。地元の方のお話では、半世紀ほど前は現在の墳頂からさらに1mほど高かったということである。墳頂部には4枚の石室天井石が露出しており、玄門側の2枚（1枚は楣石）は盗掘により原位置を動いていた。また、石室内部は天井から0.8mの高さまで流入土で埋まっていた。

以前、墳丘とその周囲は深い藪で覆われており、発掘調査に先立つ2年ほど前、土地管理者が重機により藪を取り払った際に、地元の方が須恵器壺・器台を採集している。採集地点は石室開口方向やや南の墳丘裾部で、大部分が露出していたとのことである。



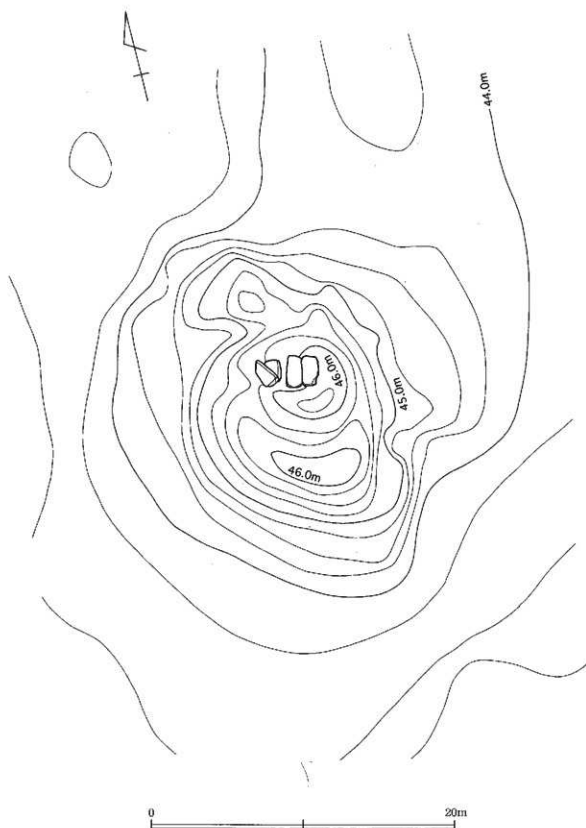
第2図 調査地位置図 (1/5,000)

2) 調査の方法

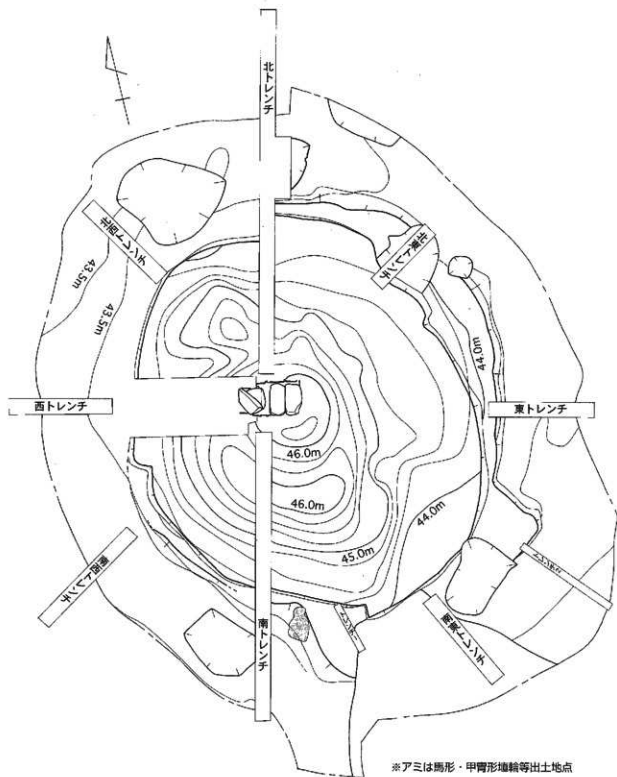
石室の主軸に平行および直角のトレンチを4本設定し、墳端と周溝の確認を行った。しかしながら後世の擾乱が著しかったので、各トレンチ間にさらに4本のトレンチを設定し、墳端の確認を行った。

石室については、天井石を現状で実測した後、内部の実測にとりかかった。その際、すでに原位置から動いていると判断した玄門部側から2番目の天井石を動かした。その下の天井石は軸石の上の楣石で、原位置を動いていないことがわかったが、上に乗っていた天井石を除いたため不安定となり、危険だったのでこれも移動した。その後、流入土を除去して実測図を作成した。墓道の検出のため、前庭部に石室主軸と直角方向にトレンチを設定し掘り下げたが、後世の擾乱により、すでに墓道は破壊されていることが推測された。

平成11年10月18日からの追加調査では、周溝と前庭部をほぼ完掘した。周溝検出の際には、造出および前方部基部の可能性のある地山の高まりを、墳丘南側と南東部で検出した。また、埴輪列検出および盛土確認のため墳丘上に南北方向のトレンチを延長したが、埴輪列は検出できなかった。



第3図 調査前墳丘測量図 (1/250)



0 20m

第4図 調査後墳丘測量図 (1/250)

第2節 遺構

1) 墳丘 (第3～7図、図版1～3・7)

墳丘は後世に大きく変形しており、地上部分については原形をとどめていなかった。墳丘の高さは現状で約2.7mであるが、地元の方のお話では以前はさらに1mほど高かったという。

各トレンチでの土層観察では、北・南・北西・西・東・南西トレンチで黒色土・暗灰色・暗黄灰色の周溝埋土がみられ、このうち、北・南・北西・東トレンチでは周溝の立ち上りが確認できた。北トレンチで周溝の幅は約6.2mを測り、周溝の深さは最も深い箇所でも20cmときわめて浅い。耕作等により地山面が削平されているものの、いずれにしても幅広で浅い周溝を墳丘周囲にめぐらせていたと推測される。周溝内のほぼ全周で、埴輪片などが出土している。なお北トレンチでは、墳丘裾部をめぐる周溝の外側に、幅約2.8m、深さ約15cmの浅い掘り込みが観察されたが、他のトレンチでは確認されていないので周溝の可能性は保留する。以上の観察結果より、猫追1号墳は径約27.2mの円丘に幅約6.2mの周溝をめぐるし、南と南東に突出部をもつ墳形が想定される。

南トレンチのみ墳丘盛土が確認された。黄色土・黒色土を10cm程度交互に積み重ねた上に約50cmと褐色土をやや厚く積む。さらにその上にも黄色土・黒色土の互層を積むという、丁寧な盛土の状況がみられた。

南突出部は、地山削り出しにより形成されている。西辺の一部のみ残存している。先端部は削平され、東側も後世の擾乱を受けており、全形は明らかでない。周溝の底面から検出面までの高さは30～40cmであるが、周溝との境は明瞭でない。西辺基部では埴輪が集中して検出されており、完形に復元可能な馬形埴輪・甲冑形埴輪などが出土した。

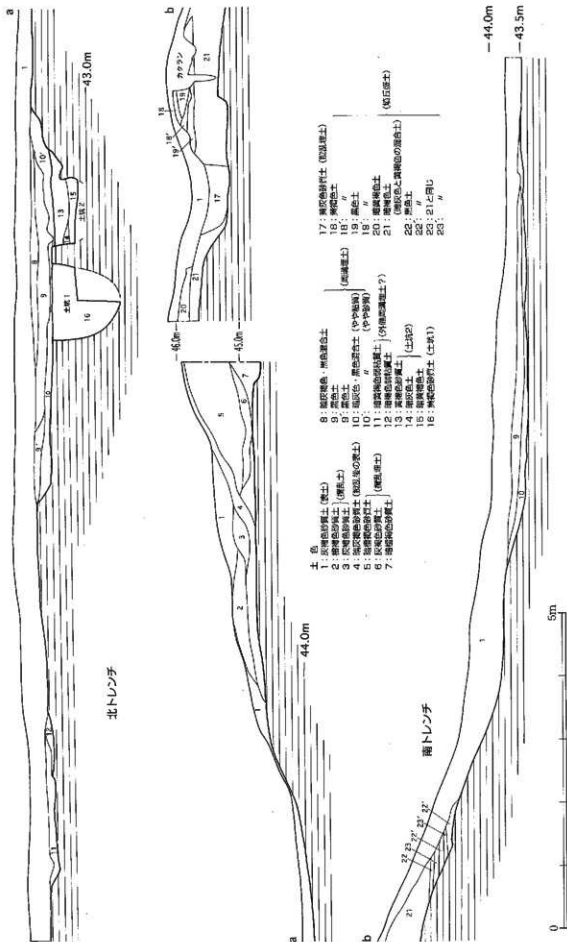
南東突出部についても、南突出部と同様に地山削り出しにより形成されている。残存していた高さは10cmほどであったが、周溝との境が明瞭であった。長さは約4.5mほどだが、南西側は擾乱を受けていたため幅は不明である。コーナー部は若干丸みを持つものの、ほぼ直角になる。

2) 石室 (第8・9図、図版3～6)

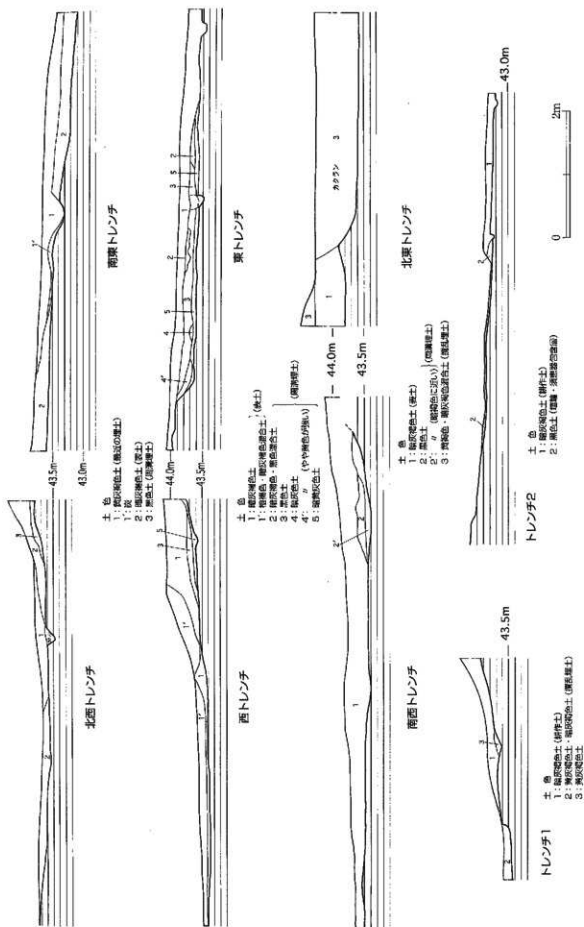
石室は奥壁がほぼ墳丘中心に位置し、谷の基部(西)に向かって開口している。開口方向はN80°Wである。石室内部全面に、赤色顔料が塗布されていた。石室規模は、床面で長さ2.77m、前壁幅2.00m、奥壁幅1.97m、最大幅(奥壁から1/3部分)2.11mであり、玄室プランはほぼ1対1.4の長方形である。天井の高さは約1.6m、玄門幅は段状部分で0.55m、最も狭い部分で0.36mを測る。

天井石は盗掘の際に動かされていたが、赤色顔料の付着状況から、玄門の天井石となる両袖石に掛け渡された幅広の楣石1枚の上に、玄室天井石が3枚置かれていたと復元される。

玄室は側壁中央部分に天井石まで達する縦長の板石を用い、その前後を割石小口積みで埋めるという特殊な構築法である。奥壁に向かって左側壁は板石の前後を床面から天井まですべて割石小口積みで埋めているが、右側壁の奥壁側には小型の板石が立てられており、その上を割石で充填している。奥壁には約1/2弱の高さの腰石と割石小口積みで構築されているが、右隅は腰石が届かず隙間ができており、割石で埋めている。玄門部には縦長の板石2枚を袖石として用いており、両袖石の基部では2段の割石で構築された約20cmの段を挟んでいる。袖石と側壁の間に生じた隙間は割石で充填しているが、袖石上端では側壁に接している。玄室壁面は4面とも持ち送りがみられる。なお、割石部分には、所々に日張りの粘土が付着していた。

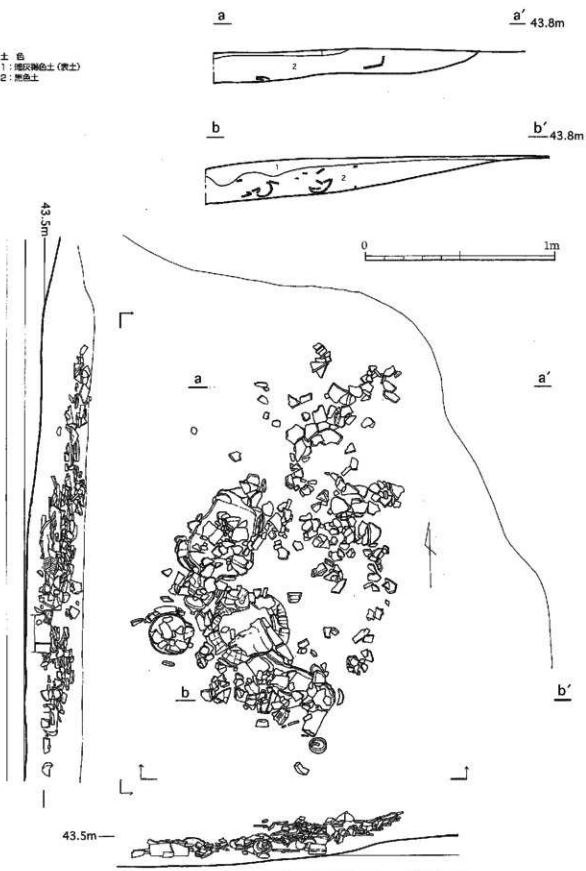


第5図 南北トレンチ土層図 (1/60)

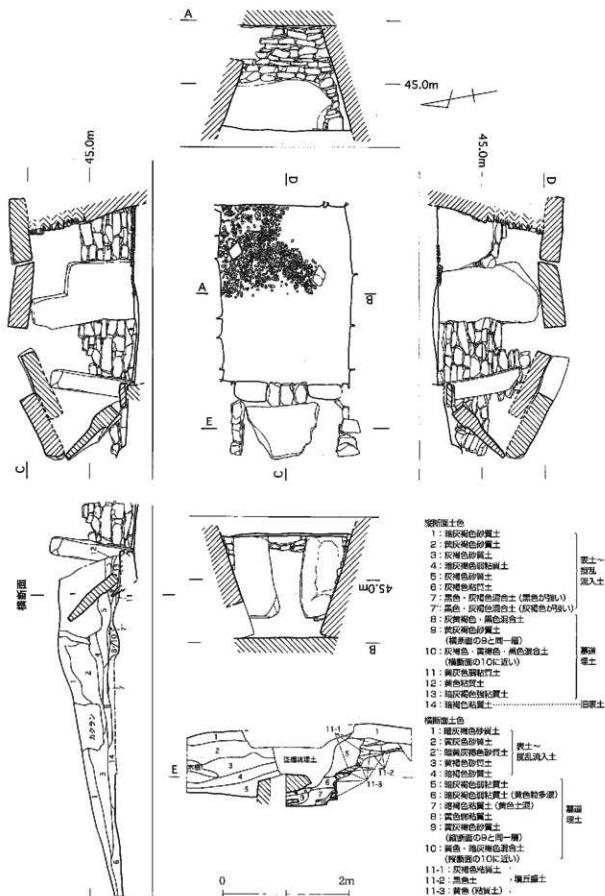


第6図 各トレンチ土層図 (1/60)

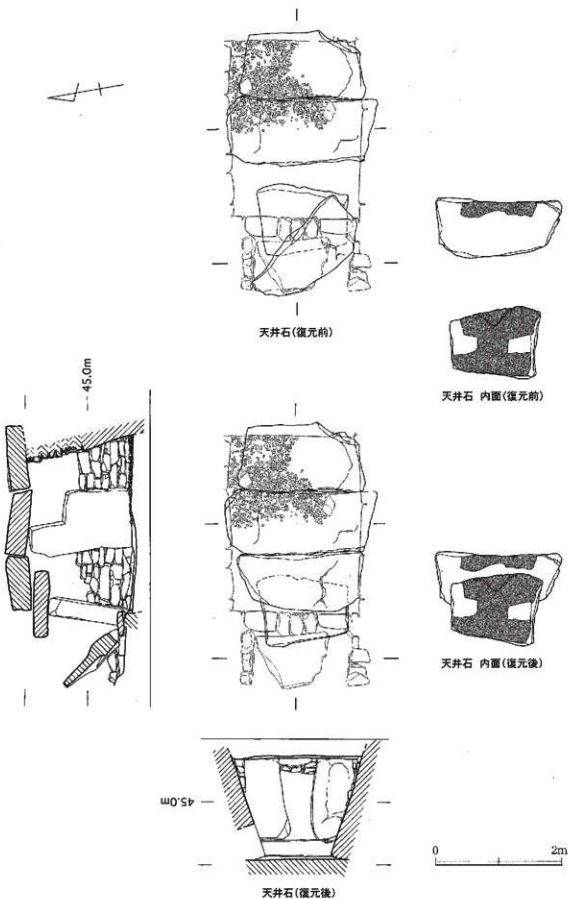
土 色
1: 褐色黄白色土 (黄土)
2: 黑色土



第7圖 南突出部道輪出土狀況圖 (1/20)



第8图 石室実測図 (1/60)



第9圖 石室天井石夾測圖 (1/60)

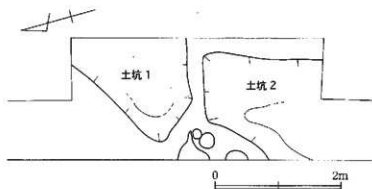
床面には1～5cm前後の円礫が敷き詰められていたが、左奥に1/4残存する程度であり、大部分が盗掘による攪乱を地山まで受けていた。

石室石材のうち、大型の板石はすべて花崗岩である。割石は、緑色片岩と花崗岩を約2対1の割合で使用している。また、石室内の遺物はほとんど盗掘により持ち出されていたが、甲冑の一部かと思われる鉄片と刀子が出土した。

石室には羨道がなく、低い前庭壁が構築される。奥壁に向かって左側の前庭側壁は攪乱により破壊され、基部が残存するのみであった。また、この攪乱は前庭部から前方へ延びており、このため墓道はほぼ完全に掘削されていた。縦断面図では墓道が水平に近い形で延びているように見えるが、これは攪乱の床面である。右側壁は高さ約50cmと低いが、側壁上面には墳丘盛土が被さっていて天井石が架けられておらず、当初からこの高さであったことがわかる。すなわち、側壁の補強も兼ねて、黄色土・黒色土・灰褐色土を版築状に積んだ墳丘盛土を切り込み、墓道を築造したものと考えられる。また、閉塞石基部より約1.2mから旧表土と思われる黒色土の残存がみられる。追葬痕跡については明確に確認できなかった。

3) その他の遺構 (第5・10図、図版3)

北トレンチで不定形の土坑、小ピットを検出した。今回の調査は古墳の確認調査が主であるので、内部の掘り下げは行わなかった。断面観察では土坑1は深さ約1.6mであり、黄褐色砂質土が単一で堆積しているが、黄褐色砂質土・暗灰色土・暗黄褐色が層状に堆積している土坑2と埋土の土質が大差ないので、一応土坑とした。これら二つの土坑の上面を、古墳周溝底部として整地している。小ピットも性格は不明である。遺物の出土はみられなかった。



第10図 その他の遺構 (1/60)

第3節 遺物

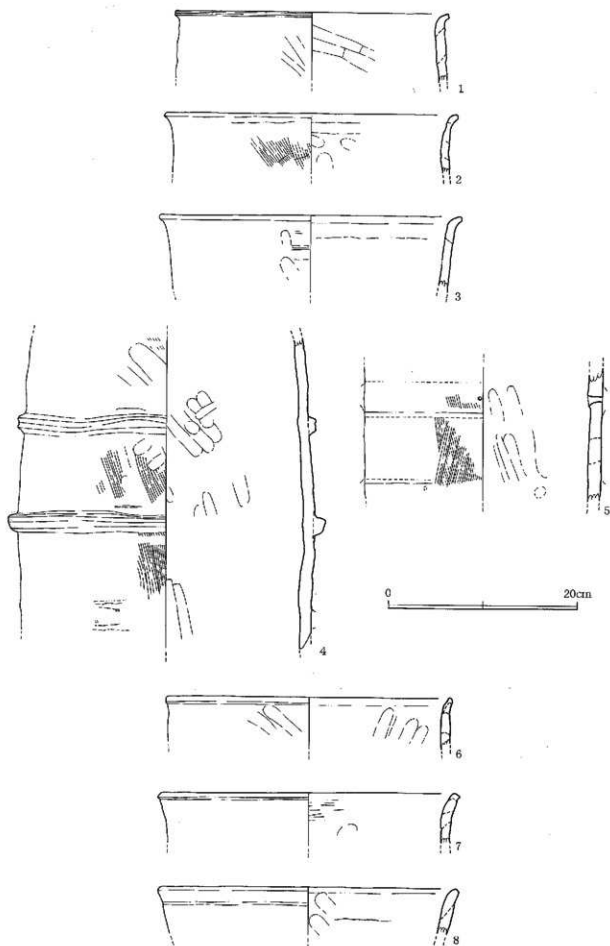
猫追1号墳ではパンコンテナにして約40箱の遺物が出土したが、大部分を埴輪類で占めている。埴輪類は各トレンチで出土しているものの周溝での出土がほとんどであり、おそらく、大部分が周溝へ倒壊したため、原位置を保っていないと考えられる。したがってここでは、埴輪など器種別に、その概略を記すことにする。

1) 円筒埴輪 (第11～14図、図版8～9・12)

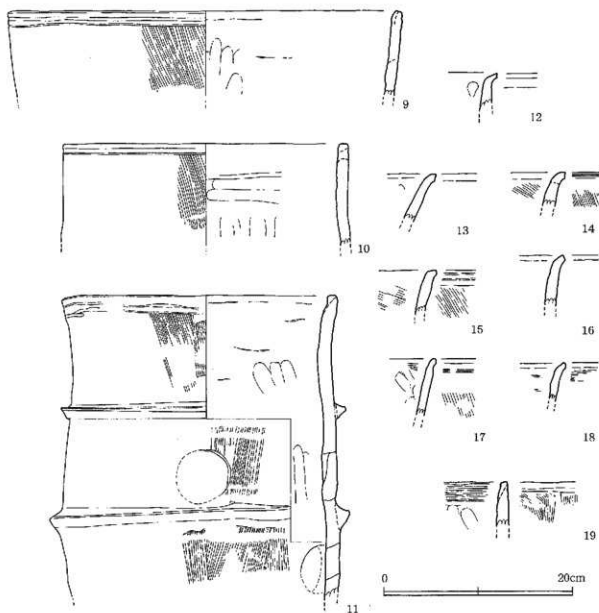
出土した埴輪の大部分が円筒埴輪だが、胴部～底部にかけては朝顔形埴輪と区別ができない。したがって、明らかに朝顔形埴輪であると判別できるもの以外、特に胴部と底部については、円筒埴輪に含めた。

1～3、6～19は円筒埴輪の口縁部で、4・5は胴部である。1～3は口縁端部が短く外反するものである。1は口縁端部に面をもち、復元口径29.0cmを測る。口縁部付近を丁寧なヨコナデ、内面は斜位のケズリである。2は復元口径31.0cmを測り、外面はタテハケで内面はナデである。3は復元口径32.0cmを測り、外面はヨコナデ後一部ナデを施す。4は比較的残りの良い円筒埴輪である。タガは2条残存しているが、下端にもタガの貼付痕があり、少なくともタガは3条あったと考えられる。胴体をタテハケで調整した後、タガを貼付け、上下端をヨコナデで押さえつける。透孔は見られなかった。外面はタテハケ後部分的にナデ、内面はケズリとナデを施している。外面のハケメにかすかに赤色顔料が残る。5はタガ2条貼付けされていたが、両方とも剥離している。外面はタテハケ後、タガを貼付している。一部赤色顔料が残る。内面は縦方向のナデである。また、上のタガの貼付位置に、錐状工具で内面から4mm前後の小孔を穿っている。6～8の口縁端部は短くやや外反する。6は復元口径30.0cmを測る。口縁部付近にヨコナデを施し、外面は赤色顔料が残る。7は復元口径32.0cmを測る。口縁部付近はヨコナデだが口縁部内面に部分的にヨコハケが残り、その上にヨコナデを施している。外面に一部赤色顔料が残る。8は復元口径31.4cmを測り、外面に一部赤色顔料が残る。9～11は口縁部がほぼ直立する。9は復元口径40.4cmを測る。外面は粗いタテハケだが、口縁部付近では幅1cmの板状工具によるヨコナデに切られている。内面は縦方向のナデ。10は復元口径30.0cmを測る。外面はタテハケだが、口縁部のヨコナデに切られている。内面は上がヨコ方向のナデ、下が縦方向のナデである。11は比較的残りの良い円筒埴輪で、復元口径29.2cmを測る。タガが2条残されているが、両者とも上端が下端より突出があり、断面がほぼ三角形を呈している。外面はタテハケ。また、口縁に2条の沈線を巡らしている。透孔は上から2段目と3段目に円形のものが確認される。赤色顔料が残る。内面は縦方向のナデである。12～19は口縁部片だが、口縁端部が短く外反するもの、やや外反するもの、直立するものに大別できる。12～16は、外反する口縁部であり、17・18はやや外反する口縁部である。14は口縁部付近の内外面に、斜位のタテハケが残る。15は、短く外反する口縁部であり、内外面に斜位のハケメを施した後、口縁部にヨコナデを施している。外面に一部赤色顔料を残す。19は直立する口縁である。外面にタテハケ、口縁部内面にヨコハケを残す。

20～41は円筒埴輪の胴部(タガ部)である。20は口縁へ向かって外反していく器形である。摩滅が著しい。21は摩滅が著しいが、内面に指頭痕が一部残る。22・23はタガの下に凹線があり、円形

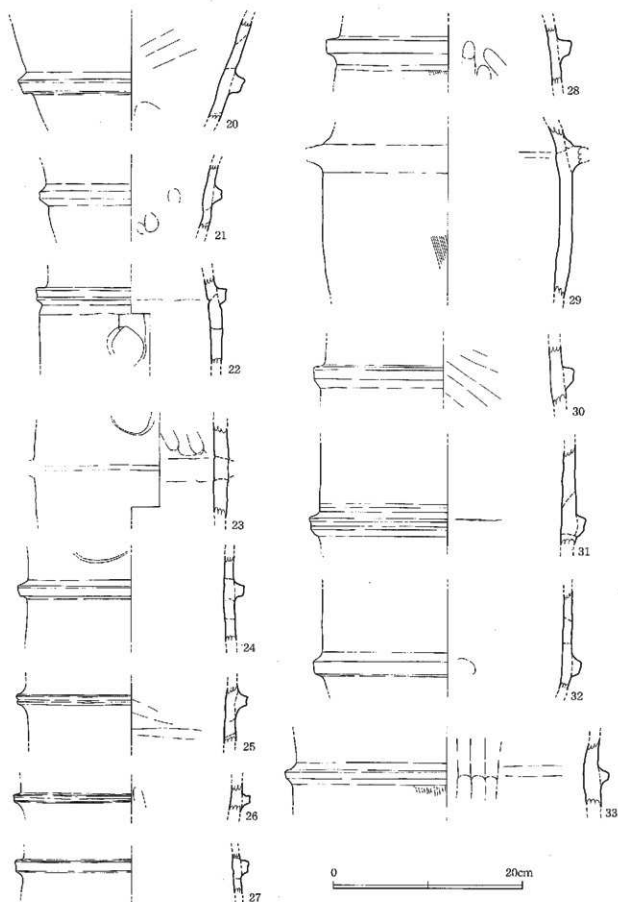


第11圖 円筒埴輪実測図① (1/4)

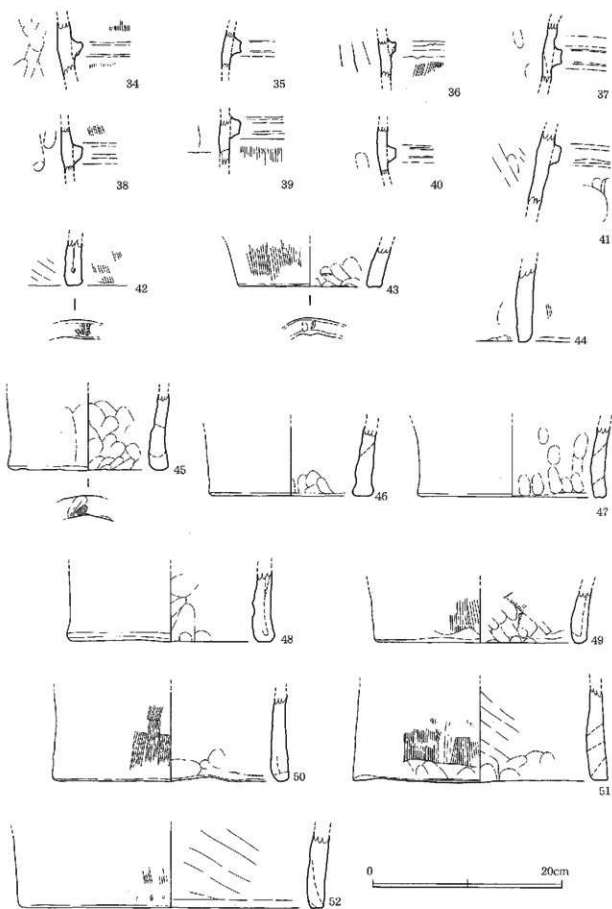


第12図 円筒壇輪実測図② (1/4)

の透孔が確認できる。外面に赤色顔料が残る。23はタガが剥離している。24は円形の透孔が確認でき、外面には赤色顔料が付着している。ヨコナデを施す。25・26は外面に赤色顔料が残る。28は外面タテハケの上にタガを貼付ける。内面はナデで、外面に赤色顔料を施す。29はタガが剥離しており、外面に一部タテハケを残す。30・31は摩滅が著しく、調整は不明。32・33は外面に赤色顔料が残り、33は外面タテハケで内面は縦方向のナデ。34～41は胴部片である。34・36・38・39は外面にタテハケが残り、34・36・37・38には外面に赤色顔料が残る。41は口縁に向かってやや外反する器形だと考えられ、円形透孔の一部が確認される。



第13図 円筒地輪実測図③ (1/4)



第14圖 円筒埴輪実測図④ (1/4)

42～52は底部である。42は底部に棒状の圧痕が残り、外面はタテハケ。43は復元底径14.9cmを測り、底部に棒状の圧痕がみられる。外面はタテハケで、内面には指頭痕が残る。44は外面にタテハケが一部残る。45は復元底径15.9cmを測り、底部に木目のある棒状の圧痕を残す。内面は指頭痕が顕著である。46・47・48はそれぞれ復元底径16.8cm、19.4cm、22.0cmを測る。外面は摩滅のため調整不明だが、内面は指圧痕が著しい。49・50・51・52はそれぞれ復元底径22.4cm、25.0cm、27.0cm、32.2cmを測る。外面にタテハケが残るが、底部付近はナデ消されている。内面は指によるナデである。

2) 朝顔形埴輪 (第15図、図版10)

1は口縁部で、復元口径46.1cmを測る。内外面に斜位のハケメを施し、外面に赤色顔料を残す。タガが1条巡っている。2・3は口縁部から頸部に連なる部位で、外面に斜位のハケメと赤色顔料を残す。内面はナデである。2にはタガが1条巡る。4は口縁部から頸部、5は頸部から胴部に連なる部位である。両者とも外面に斜位のハケメと丹塗りが残る。6は胴部だが、径が1リ筒埴輪より大きいので朝顔形埴輪とした。タガが1条貼付けられ、外面タテハケ、内面はナデを施している。

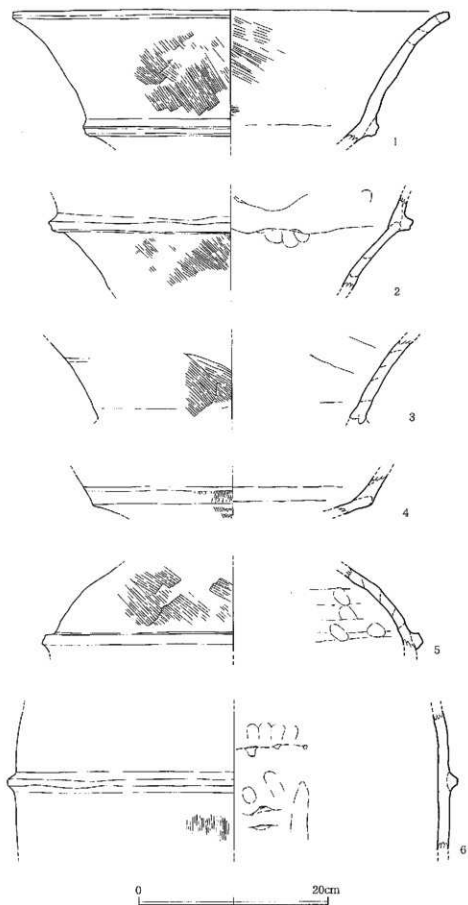
3) 形象埴輪

①蓋形埴輪・家形埴輪 (第16図、図版10・11)

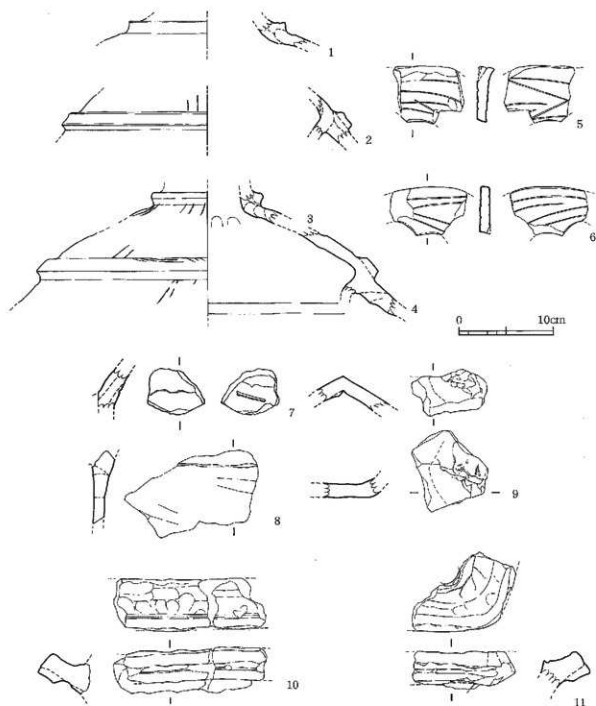
蓋形埴輪については胴部が判別できなかったため、笠部を中心に図示した。1と3の軸受け部の突帯は形態が異なり、また径も異なるので、複数の製作単位があった可能性がある。1～4は笠部であるが、これから軸受け部下端と笠部中央にタガをもつ形態と想定される。また、タガにより二つに区画された笠部には、板の表現と考えられる3本1単位とした線刻が施されている。外面の調整は比較的丁寧なナデとケズリで、赤色顔料が施されている。内面は指によるナデである。1は軸受基部でタガ上端径は16.6cm、2は笠部でタガ上端径は29.2cmを測り、笠部に縦位の線刻が2本残る。3は軸受基部でタガ上端径は11.4cmを測る。線刻が3本1単位で2単位、合計6本残る。4は笠部でタガ上端径は34.0cmである。

5・6は両面に線刻があるので蓋形埴輪の立ち飾りと考えたが、正確な部位は不明である。線刻の施文状況が類似しているため、同一個体の可能性が高い。5は上面が生きており、一部に赤色顔料が残る。6は上面が生きており、下面は縁取りしている。

家形埴輪についても部分的な破片が多く全体の形状は不明であるが、赤色顔料が塗布されていたと考えられる。7は屋根部から壁体部に連なる個所とした。貼付痕があり、軒先へ続くと考えられる。内面に3cmほどの線刻がある。8は壁体部だが、上端部には接合しやすいように若干の溝をつくっており、ここに屋根部を接合すると考えられる。外面には赤色顔料が残る。9は屋根の棟部である。外面に一部赤色顔料が残る。10は家形埴輪の基部で、内側で垂直な壁に接していたと想定すると外側が上になってしまうため、傾きが異なる可能性がある。上面の中央部は不定方向のナデで、外側端部はヨコナデである。赤色顔料が付着している。11は基部のコーナー部分だが直角にならずひらいている。調整などは10と同じなので、同一個体と考えられる。



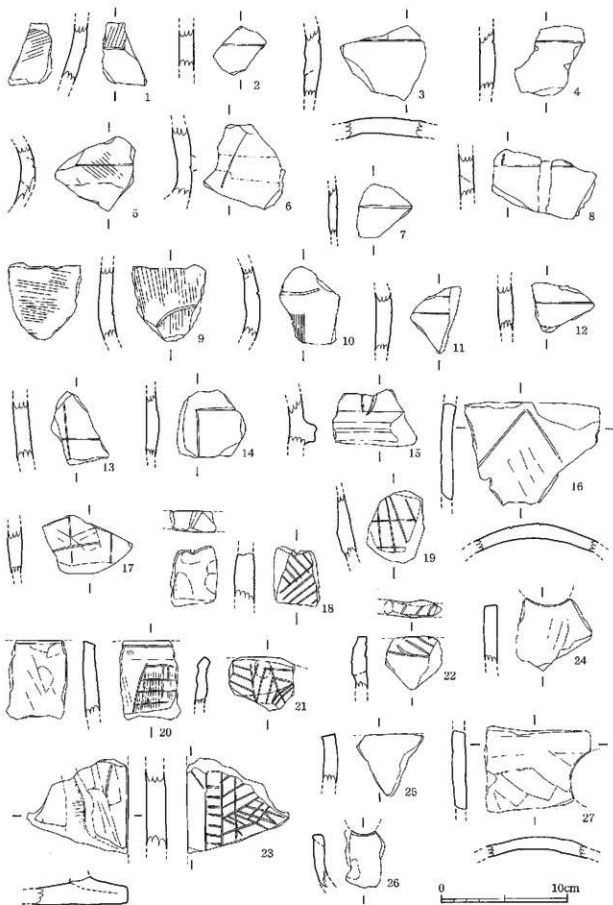
第15图 胡顔形埴輪実測図 (1/4)



第16図 蓋形埴輪・家形埴輪実測図 (1/4)

②線刻・透孔のある埴輪 (第17図、図版11・12)

全体の形状は不明であるが、線刻や透孔の一部が確認できた破片を図示した。1は内外面の上部にハケメを施しており、外面はハケメ後に線刻を1本入れている。線刻の下はハケメをナデ消している。2は線刻1本であり、厚さ1.2cmと厚めである。3も線刻1本だが、器体はやや湾曲している。4も線刻1本で、厚さが1.1cmとやや厚い。5は外面のハケメの上から線刻を1本入れている、器体は湾曲している。6はタガの剥離痕の下に細い線刻が1本入る。蓋形埴輪か。外面に赤色顔料

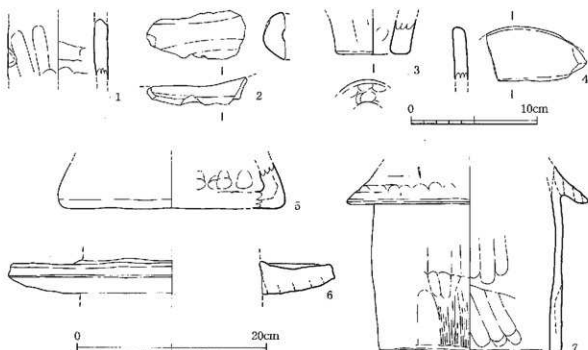


第17図 線刻・透孔のある埴輪実測図 (1/3)

が施されている。7は線刻が1本入る。8は線刻が1本入り、厚さは1.1cmと厚めである。9は内外面ハケメで、外面はハケメ後に曲線状の線刻を1本入れている。10は外面にハケメが残り、やや曲線状の線刻が1本入る。外面には赤色顔料が一部残る。11は1.2cmの間隔で平行に2本の線刻が入る。外面は赤色顔料が残り、厚さは1.1cmである。12は1.8cmの間隔で線刻が2本入るが、平行ではない。13はほぼ十字に線刻が2本入り、外面には赤色顔料を施す。厚さは1.1cmである。14は縦と横の2本の線刻がほぼ直角を作っているが、三角形の可能性もある。調整は摩滅が著しく不明瞭である。15はタガ貼付後、上端に線刻を2本入れている。仮に円筒埴輪であれば、ヘラ記号であろうか。外面に赤色顔料がかすかに残っているが、摩滅が著しい。16は線刻2本が角度を作っている。摩滅が著しく線刻の始点と終点の確認できないので、三角形とは断定できない。器体は湾曲している。17は細い2本の線刻が入り、赤色顔料が残る。18は右上から5本斜めに線刻を施した後、左上から5本線刻を施す。1.6cmとかなり厚く、上端部には小孔が穿たれている。内面には指頭痕が残る。19は縦3～4本線刻を入れた後、横線を入れている。20は横に4本線刻を施した後に、左に斜めの線刻を1本入れている。また、線刻内はハケメのような縦の線が数本入っている。上端部はしっかりと面を作りだしており、口縁部の可能性が高い。また器体が湾曲しているので、筒形の形態になると考えられる。内面はナデとケズリである。21は縦と横の線刻数本で文様を構成している。上端部は生きており、赤色顔料が外面から内側の一部まで確認される。22は上端部と外面上部に連続して線刻を数本施している。壺形埴輪の立ち飾りか。23は盾形埴輪と考えられるが、部位は判然としなない。外面は端部より1.5cmの位置に幅1.2～1.0cmの間隔で縦三本の線刻を入れ、外側の区画を斜めの線刻で充填する。真ん中の縦線より内側に、右上、左上から交互に斜線を入れているようである。外面には赤色顔料がかすかに残る程度だが、内面の本体との接合面以外の箇所には赤色顔料がよく残っている。24は円形の透孔、25は三角形と考えられる透孔が確認できる。26は径2.8cm前後の小孔である。おそらく、形象埴輪の一部であろう。27は円形の透孔であり、器体が湾曲しているので、筒形の形状になると考えられる。

③その他の形象埴輪（第18図、図版13）

1は円筒状の器形だが、径約8.0cmと小さい。内外面とも指による調整が認められる。2は中心に小孔を穿っている。家形埴輪の一部の可能性もある。3は円筒状の器形の底部だが、底径は5.4cmと小さい。内外面ともに指によるナデで、底面は指もしくは棒による調整が施されている。4は厚さ1.0cm前後で、形象埴輪の一部と思われる。5は底部と思われるが、形状は不明である。底部は曲線を持ち、円形になる可能性もある。厚さ1.9cm前後と厚く、内面には指頭痕が著しく残されている。6は壺形埴輪の笠部分と考えたが、傾きが異なるため保留にした。径約34.6cmの環状の埴輪である。内側には貼付痕があり、径約19.0cmの筒状のものに接合していたと考えられる。上面に一部指頭痕を残し、後はナデで仕上げている。上面には赤色顔料が一部残っていた。7の円筒状の胴部は、甲冑形埴輪の近くで出土したため当初は甲冑形埴輪の脚部とも考えたが、径が異なり、また笠部がつく器形になることから別個体とした。円筒は底径19.4cmで、やや裕円気味である。厚さは底部付近で1.3cm前後と厚いが、笠部に近づくにつれて0.9cmと薄くなっていく。底部から笠接合部までの高さは16.5cmである。円筒部の外面底部付近にはタテハケがみられるが、内面はナデを施している。笠部外面は指頭痕を残し、線刻が1本みられる。



第18図 形象埴輪実測図（1～4は1/3、他は1/4）

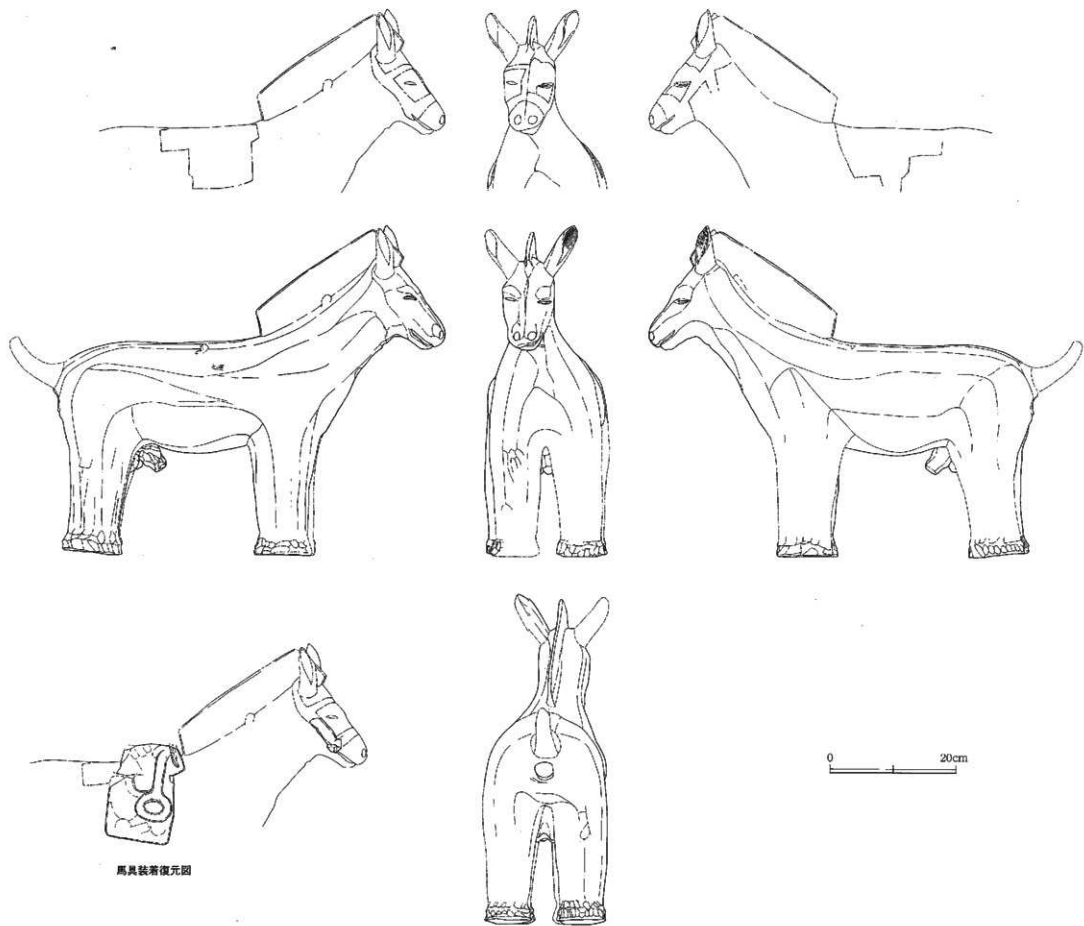
4) 馬形埴輪・甲冑形埴輪

墳丘南側突出部の基部では、埴輪類がまとまって出土している。中でも、馬形埴輪・甲冑形埴輪については、全体の形状がわかるものとして、九州では類例のないものである。なお、甲冑形埴輪については顔の痕跡が一部残されているため人物埴輪とする場合もあるが、全身に塗布された赤色顔料や肩の文様から勘案すると器財埴輪の性格があったと考えられるので、ひとまず、甲冑形埴輪と呼称することにした。

①馬形埴輪（第19・20図、巻頭図版2・図版14）

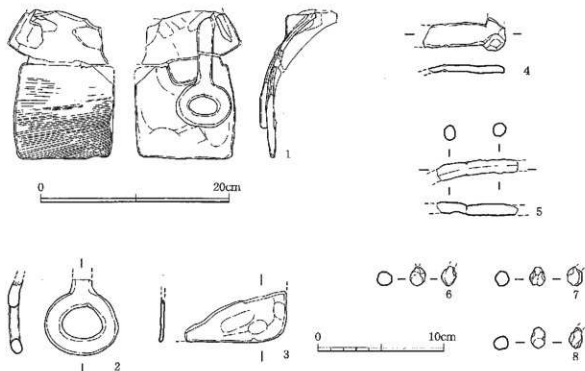
馬形埴輪は左前脚・左後脚、右耳、尾が欠損していたが、比較的残りはよい。現存で、高さ（蹄から耳まで）52.0cm、全長（尾を除く）61.8cmを測る胴長短足の小型馬である。

脚部は底部を肥厚させ、蹄を明確に形作る。右前の蹄が一部欠損していた。底径は長さ8.5～9.2cm、幅7.4～7.6cmのやや楕円気味であり、下から上へ丁寧なナデを施している。脚部の高さ（蹄から付根）は17.4cmであり、蹄との境で長さ約7.6～8.2cm、幅約6.2～6.9cm、付根付近で長さ約11.2～11.4cm、幅約8.6～8.8cmを測り、やや楕円気味の脚部で胴体に近づくにつれてわずかに広がっていく。右後脚には、ハケを当てた痕跡が若干残る。厚い粘土板で蹄を成形し、円筒状の脚部を接合したと思われる。前脚と後脚との間隔（付根付近）は約16cmで、蹄より胴体までの高さは33.4cmである。胴体については腹部が下方にカーブを描き、背骨の隆起を表現しているなど実物に忠実である。中は空洞である。両後足の付根には、丁寧なナデで調整された雄の生殖器が一式表現されている。また、透孔は尻部に径3.0cmほどのものが穿たれているのみである。



馬具裝着復元圖

第19圖 馬形罐輪實測圖 (1/6)



第20図 馬形埴輪馬具実測図 (1は1/4、他は1/3)

頭部については、最大長約16cm、最大幅（眉～目）約7.5cmと比較的小ぶりである。幅は口に向かってすぼまっており、顔骨の微妙な隆起を表現している。また、頭部自体も中心より右にずれているが、目は右側が、口は左側が上になっており、左右非対称である。そのため、角度によって様々な表情をみることができる。目は左目幅3.0cm、右目幅2.6cmの切れ長の日である。丸く収めた鼻づらには、径1.3cmの工具で穴を二つ穿っている。耳は左耳のみ残存しており、厚さ4mm前後の粘土板を巻きつけて製作して、内面にはハケメが残っている。タテガミは頭頂部付近は欠損していたものの、ほぼ長方形の形状である。

なお、馬形埴輪は摩滅が著しく、調整は一部確認できるがほとんどが不明瞭である。胎土は2～5mm前後の砂粒を含み、色調は明黄褐色、焼成は良好である。

また、若干の馬具が出土しているが、全て着脱もしくは貼付されるもので、本体と一体して製作していない。色調・胎土ともに本体と類似しており、本体には馬具の貼付痕と思われる明赤褐色の痕跡が残っていたため、馬具を装着した状態で焼成されたものと考えられる。馬具は、胴体に着脱式の簡易な鞍が、頭部には革帯と轡が装着され、箇所は不明だが鈴も数点付けられていたと推測される。第20図1は鞍の右半分である。鞍には輪鍔が貼付けられ、前輪の立ち上がりがあり、後輪と思われる立ち上がりも若干認められる。しかし、馬本体には障泥より幅の広い鞍の貼付痕が残っており、後輪の立ち上がりではない可能性もある。一般的には鞍と障泥の幅はほぼ同じであるが、このようなあり方は類例を知らない。いずれにせよ、部分的なため全体の形状は不明である。鞍と障泥は別個につくり、粘土紐で接合している。境には半円形の刻みが施してあって、その上から輪鍔を貼付している。前輪部分と鞍部分との接合が内面でよく残っている。障泥部分の内面には、横方向のハケメが施されている。2は左半分の輪鍔、3は障泥の端部である。厚さはそれぞれ、1cm弱、

mm弱で大きさとともに1とはほぼ同じである。4は轡で、幅1.9cm、厚さ5.5mmを測る。先端は欠損しているが、おそらく轡轡であろう。5は革帯もしくは手綱であろう。幅1.2cmを測る。6～8はと思われる。径約1.2cmで、紐の部分は欠損していた。

甲冑形埴輪（第21図、巻頭図版3・図版14）

甲冑形埴輪は冑・肩甲・短甲・草摺が一式揃ったものであり、前面が失われていたものの、残りは好であった。脚部についてはおよそ筒状になると考えられるが、復元し得なかった。現存高は2.0cm、最大幅（肩甲部）44.8cm、頸部幅11.6cm、腰部幅24.8cm、草摺裾部径41.6cmを測り、全身に赤色顔料が塗布されていた。

冑には鉢部の腰巻部に幅1cmの明瞭な断面台形の突帯が巡り、その下に鉢が続く。鉢部は腰巻部幅14.6cmを測り、頭頂部に向かってすばまっていく。頂部には管を表現した突起があつて径7mm前後の小孔が穿たれており、おそらくはここに羽根などの装飾を差し込んでいたのだろう。鉢部には衝角付冑のような正面の明瞭な稜がないことから、おそらくは肩庇付冑を表現したものであろうが、残念ながら底部は失われていた。鉢部分には下に向かって若干広がっていくが地板の表現はなく、不整方向のケズリを施している。顔面部については大部分が失われていたが、冑や目の切口、下顎の一部が残っており、顔が表現されていたとすることができる。頭部の厚さは1.5～0cm前後で、鉢部や頸部付近がやや厚い。鉢の下に頭部には一部縦方向のハケメが残る。

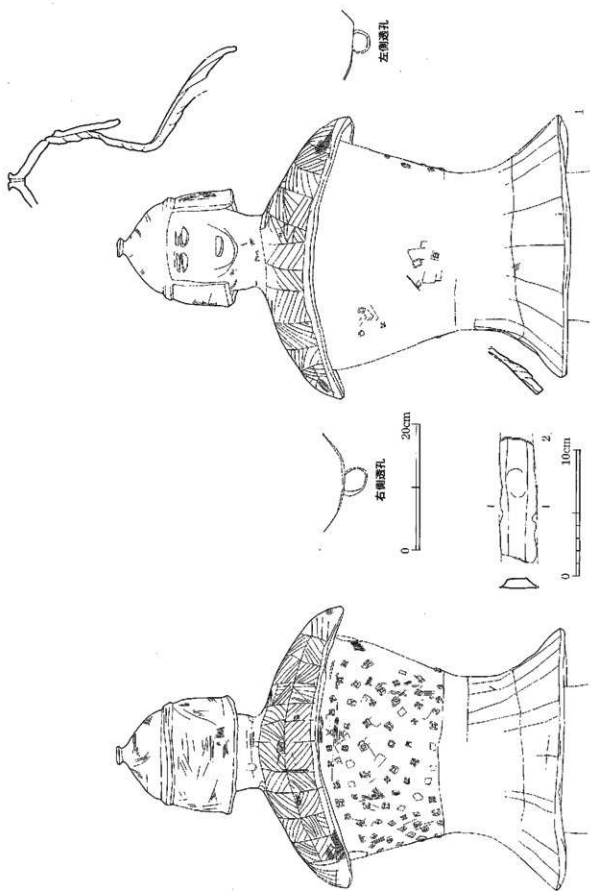
肩甲の下端は、上方へ弧状にカーブを描く。全面に綾杉文が施されており、縦と横の線で割付した後、斜線を入れている。一部ハケメが残っている。

短甲と草摺は連続して成形しており、短甲には全面に1cm前後の四角形粘土粒が貼付されている。おそらくは革綴を表現したものと考えられるが、地板の表現はなく型式は不明である。ただ、残りよい後面の粘土粒をみると、縦・横に規則的な並びは見られず、むしろ斜めに配列したように見られることから、おそらくは三角板革綴短甲を模したのではないかと推測される。短甲はハケメを施したあと、粘土粒を貼り付けヘラ状の工具で仕上げている。また、脇には径4.0cm前後の小孔が左右にそれぞれ穿たれているのみである。草摺については、縦線を一定の間隔で引き、裾から約9cm上のところに横線を一周めぐらして上下を二分している。後面の中央には横線の下にさらに横線が確認できたが、明瞭でない。短甲と草摺の境には約4.3cm幅の帯の貼付痕がある。第21図は甲冑形埴輪の帯と思われるが、幅3cm前後を測り、本体の貼付痕と整合しない。他の部品が付いていた可能性もある。なお、短甲部分の厚さは1.3cm前後、草摺部分もほぼ同様だが裾部では若干厚く、1.5cm前後を測る。

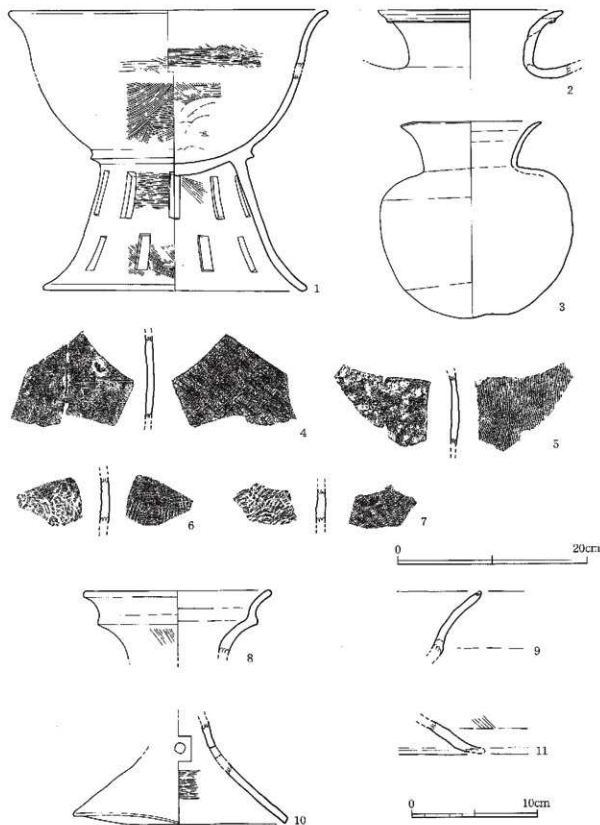
甲冑形埴輪の胎土には1～2mm前後の砂粒をやや密に含み、色調は頭部については暗褐色、後面は茶褐色で、焼成は良好である。焼成方法や全身に赤色顔料を塗布する点が、馬形埴輪と異なっている。

須恵器・土師器（第22図、図版15～17）

蒲池1号墳からは須恵器の破片が数点出土している。ほとんどが破片で周溝内からの出土であるが、1の器台と3の壺についてはほぼ完形で、石室前庭部南側の墳丘裾部において地元の方により収集された。少量ながら土師器の出土も見られた。1は器台であり、口縁部付近の破片と杯部下半



第21图 甲冑形甗輪美測図 (1は1/6, 2は1/3)



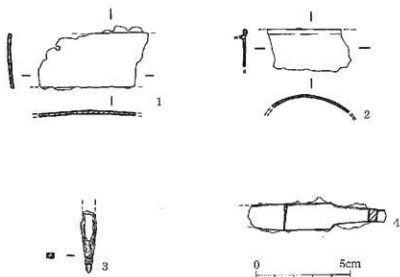
第22図 須恵器・上師器実測図 (1~7は1/4、他は1/3)

分から脚部の破片が出土している。両者は接合できないが調整・色調・焼成とも類似しており同一胴体と考え、器高は約29.5cmとなる。杯部は口径に比べて深く口縁はゆがむ。口径は復元すると約34.0cmを測る。口縁部は緩やかに反し、丸くおさまる。杯部には外面と内面上半にハケメが残るが、内面下半では無文の当て具に消されている。頸部には断面三角形の突帯が巡り、この突帯部分での頸部径は17.4cmである。脚部高は約14cm、裾部径は27.2cmを測る。脚部の外面にはハケメの上から長方形透孔を上下二段、交互に配列している。端部は丸くおさめている。2は壺の口縁破片で、復元口径19.7cmを測る。口縁端部が尖り気味で、外面のすぐ下に断面三角形の突帯がある。やや歪曲した器形になろう。外面には自然釉がかかる。調整は内外面ともヨコナデである。3は壺であり、1とともに採集された。ほぼ完形である。口径14.9cm、器高26.0cm、頸部径10.0cm、胴部最大径20.4cmを測る。口縁部は反反しながらのび、そのまま尖り気味におわる。口縁部と胴部は別個に製作して接合したように思われる。底部にはくぼみがあり、正立する。外面はヨコナデで、内面は無文当て具を使用しているようである。4と5は壺の胴部の破片である。4は一般的に見られるタタキ文様でなく、かなり細かな線で擬格子状を早する。内面はヨコナデである。5の外面は平行文のタタキだが、かなり細かく特徴的である。内面にはキズがある無文当て具を使用しているようである。6と7も壺の破片だが、両者とも外面は擬格子状のタタキ、内面は同心円文が残る。

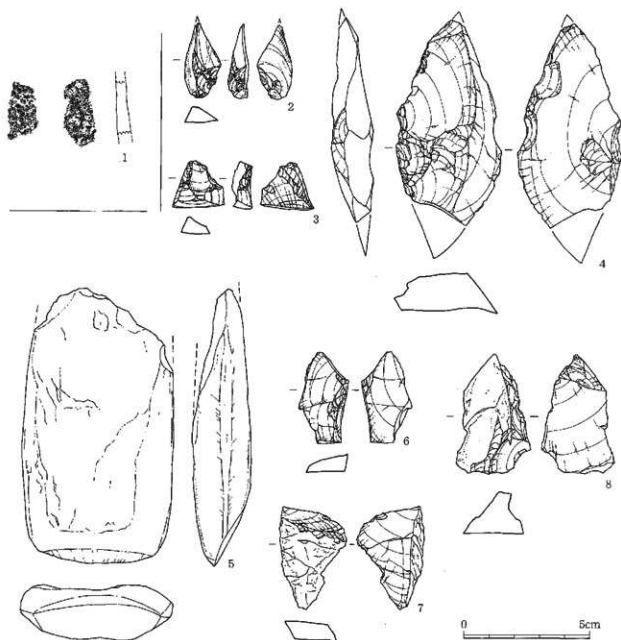
8~10は土師器である。8は二重口縁で、復元口径15.0cmを測る。摩滅が著しいが、外面にハケメが一部残る。石室前底部埋土から出土した。9は高杯の口縁部か。摩滅が著しく、調整は不明である。石室前底部埋土より出土。10は高杯の脚部である。底部は16.0~16.8cmと楕円気味である。厚さ6mmで、径8mm前後の小孔が3つ不規則に穿たれている。内外面ともに摩滅が著しいが、内面に一部ハケメが残る。外面には黒斑が2カ所見られる。11は天地を迷ったが、須恵質だったので須恵器の杯蓋とした。これは後世のものである。調整はヨコナデである。

6) 鉄器 (第23図、図版17)

石室内は盗掘を受けており、鉄片が数点出土するのみである。1は石室内出土で、長さ2.9cm、現存幅5.8cm、厚さ2mmの鉄板である。隅に径3mm前後の小孔があり、甲冑の地板と考えられる。2は石室炭道部埋土出土の湾曲した鉄板で、刀装具の一部か。上端部は丸い稜をもっており、その下に垂直の受けをめぐらす。3は石室内埋土出土の鉄鏃茎部である。現存長3.2cm、現存幅3~7mmを測る。4は石室内埋土出土の刀子である。刃先と茎部が一部欠損しており、現存長7.0cm、最大幅1.5cmを測る。茎部の厚さは5mmで、錆ぶくれが著しい。



第23図 鉄器実測図 (1/2)



第24図 出土採集遺物実測図 (1は1/3、他は2/3)

7) その他の遺物 (第24図、図版18)

1は、精円押型文の胴部片である。内面はナデ。2～4は、旧石器時代に属する。2は黒曜石製のナイフ形石器で、素材自然面を底面とする横長剥片を素材とし、右側縁部から端部にかけて基部加工が認められる。作業面となる背面の風化は他に比べ進んでいる。重さ2.29gを測る。3は、二次加工剥片である。幅広剥片の右側縁部に加工を施す。重さ2.41g。4は翼状剥片で、両端を欠損する。剥離面で構成される山形打面頂部を加撃しており、作業面が二面ある。剥片端部に二次加工を施す。肉眼で見る限り小城産サヌカイトの可能性が高い。重さ44.57gを測る。表探。5は蛇紋岩製の磨製石斧で、基部を欠損する。片刃で側縁部は丸く仕上げる。重さ218.4gを測る。墳裾北トレンチ東側黒色土中より出土。6は、不定形剥片の右側縁部を二次加工している。姫島産黒曜石製で重さ6.32gを測る。墳裾東トレンチ北より出土。7は、打痕の発達が不明瞭な破碎剥片である。姫島産黒曜石製で重さ6.82gを測る。8は珪質岩製の剥片で重さ19.2gを測る。墳丘上表探。

第1表 円筒増輪観察表

増輪	国産	出土地点	口径(cm)	底径(cm)	胎土	施装	色	備考
11-1	8	円筒南西部	29.0		1~1.5mm前後の砂粒をやや含む	良好	黄褐色	
11-2	9	北トレンチ東	31.0		1mm前後の砂粒をやや含む	良好	黄褐色	
11-3	9	南西部	32.0		1~2mm前後の砂粒をやや含む	良好	外面:暗茶褐色 内面:暗黄褐色	
11-4	8	南東部			1~2mm前後の砂粒をやや含む	良好	黄褐色	外面にすかに赤色顔料、タガ3
11-5	9	南東部基部			1~2mm前後の砂粒を含む	良好	黄褐色	外面に赤色顔料、タガ(2)貼付部に小孔
11-6	9	南東部基部	30.0		1~2mm前後の砂粒をやや含む	良好	外面:暗茶褐色 内面:黄褐色	外面に赤色顔料
11-7	9		32.0		1~7mm前後の砂粒をやや密に含む	良好	茶褐色	外面に赤色顔料
11-8	9	南トレンチ	31.4		1~2mm前後の砂粒をやや密に含む	良好	黄褐色	外面に赤色顔料
12-9	9	東トレンチ南	40.4		2~5mm前後の砂粒をやや密に含む	良好	黄褐色	
12-10		南西部	30.0		2mm前後の砂粒をやや含む	良好	暗黄褐色	
12-11	12	南西トレンチ	29.2		1~7mm前後の砂粒を含む	良好	黄褐色	外面に赤色顔料、タガ2、透孔2
12-12					1~2mm前後の砂粒をやや含む	良好	外面:暗茶褐色 内面:黒褐色	
12-13		南東部基部			2~3mm前後の砂粒をやや密に含む	良好	暗茶褐色	
12-14					1~2mm前後の砂粒を含む	良好	外面:茶褐色 内面:黄褐色	
12-15		南東部			3mm前後の砂粒をやや含む	良好	暗黄褐色	外面に赤色顔料
12-16					2~5mm前後の砂粒を密に含む	良好	黄褐色	外面に赤色顔料
12-17		東トレンチ北			1~2mm前後の砂粒を含む	良好	暗褐色	
12-18		北東トレンチ南			3mm前後の砂粒をやや含む	良好	外面:褐色 内面:黄褐色	外面に赤色顔料
12-19		南東部			1~2mm前後の砂粒をやや含む	良好	暗黄褐色	
13-20	9	北西トレンチ ~西トレンチ			1mm前後の砂粒をやや密に含む	良好	外面:暗茶褐色 内面:暗黄褐色	
13-21	9	北トレンチ			1mm前後の砂粒をやや密に含む	良好	外面:暗褐色 内面:暗黄褐色	
13-22	9	北西トレンチ南			1mm前後の砂粒をやや密に含む	良好	黄褐色	外面に赤色顔料、タガ1、透孔1
13-23	9	北西トレンチ南			4mm前後の砂粒をやや密に含む	良好	暗黄褐色	外面に赤色顔料、タガ貼付板、透孔1
13-24	9				1~2mm前後の砂粒をやや含む	良好	黄褐色	外面に赤色顔料、タガ1、透孔1
13-25	9	北トレンチ東			2~3mm前後の砂粒をやや含む	良好	褐色	外面に赤色顔料、タガ1
13-26	9	南トレンチそば			1~2mm前後の砂粒をやや含む	良好	暗褐色	外面に赤色顔料、タガ1
13-27	9				1~2mm前後の砂粒を含む	良好	暗褐色	タガ1
13-28	9	南東部			1mm前後の砂粒をやや含む	良好	黄褐色	外面に赤色顔料、タガ1
13-29	8	東トレンチ南			1~2mm前後の砂粒を密に含む	良好	黄褐色	タガ貼付板、円筒増輪か
13-30	9	南東部			1~2mm前後の砂粒をやや密に含む	良好	暗黄褐色	タガ1
13-31	8	南西部			1~2mm前後の砂粒をやや含む	良好	黄褐色	タガ1
13-32	9	南東部基部			1~3mm前後の砂粒を含む	良好	黄褐色	外面に赤色顔料、タガ1

標頭	図版	出土地点	口径(cm)	底径(cm)	胎土	焼成色・調	備考
13-33	9	東トレンチ南			1~2mm前後の砂粒をやや密に含む	良好 明黄褐色	外面に赤色顔料、タガ1
14-34	9				1~2mm前後の砂粒を密に含む	良好 黄褐色	外面に赤色顔料、タガ1
14-35	9	北西トレンチ			1mm前後の砂粒を含む	良好 黄褐色	タガ1
14-36	9	東トレンチ南			1mm前後の砂粒をやや密に含む	良好 暗黄褐色	外面に赤色顔料、タガ1
14-37	9	北トレンチ～北西トレンチ			1~2mm前後の砂粒をやや密に含む	良好 外面：暗赤褐色 内面：黄褐色	外面に赤色顔料、タガ1
14-38	9	南東部			1mm前後の砂粒を含む	良好 黄褐色	外面に赤色顔料、タガ1
14-39	9	西トレンチ～北西トレンチ			1~2mm前後の砂粒をやや含む	良好 暗黄褐色	タガ1
14-40	9	南西トレンチ			1mm前後の砂粒をやや密に含む	良好 暗褐色	タガ1
14-41	9	西トレンチ～北西トレンチ			1~2mm前後の砂粒をやや含む	良好 外面：暗黄褐色 内面：黄褐色	タガ1、炭孔1
14-42					2mm前後の砂粒をやや密に含む	良好 黄褐色	底部に木目の圧痕
14-43		西トレンチ南		14.9	1~4mm前後の砂粒をやや密に含む	良好 黄褐色	底部に圧痕
14-44		南東トレンチ			1~3mm前後の砂粒をやや含む	良好 黄褐色	
14-45	8	北トレンチ		15.9	1~2mm前後の砂粒をやや密に含む	良好 黄褐色	底部に木目の圧痕
14-46	8	西トレンチ南		16.8	1mm前後の砂粒を含む	良好 明黄褐色	
14-47	8	東トレンチ南		19.4	1mm前後の砂粒を密に含む	良好 明黄褐色	
14-48	8			22.0	2mm前後の砂粒を密に含む	良好 黄褐色	
14-49	8	北トレンチ～北東トレンチ		22.4	1~5mm前後の砂粒を含む	良好 明黄褐色	
14-50	9	北トレンチ		25.0	1mm前後の砂粒をやや含む	良好 明黄褐色	
14-51	9	北トレンチ東		27.0	2mm前後の砂粒をやや含む	良好 黄褐色	
14-52		東トレンチ南		32.2	1~2mm前後の砂粒を密に含む	良好 黄褐色	

第2表 朝顔形埴輪観察表

標頭	図版	出土地点	口径(cm)	底径(cm)	胎土	焼成色・調	備考
15-1	10			46.1	1mm前後の砂粒を密に含む	良好 黄褐色	外面に赤色顔料
15-2	10	南尖山部墓誌			1~2mm前後の砂粒をやや含む	良好 黄褐色	外面に赤色顔料、タガ1
15-3		北トレンチ南			1~2mm前後の砂粒を含む	良好 黄褐色	外面に赤色顔料、タガ貼付面
15-4	10	南東部			1~2mm前後の砂粒をやや含む	良好 黄褐色	外面に赤色顔料
15-5	10	南東部			2~7mm前後の砂粒をやや密に含む	良好 黄褐色	外面に赤色顔料、タガ1
15-6		東トレンチ南			2~3mm前後の砂粒を密に含む	良好 明黄褐色	タガ1、朝顔か

第3表 形象追輪観察表

陣図	国産	出土地点	種類	土	焼成	色	備 考
16-1	10	北トレンチ西側	蓋形	1~2mm前後の砂粒をやや密に含む	良好	暗茶褐色	外面に赤色顔料
16-2	10	北トレンチ西側	板形	1~2mm前後の砂粒を密に含む	良好	外面:黄褐色 内面:暗茶褐色	外面にわずかに赤色顔料、線刻あり
16-3	10	南西部	蓋形	5mm前後の砂粒を含む	良好	黄褐色	外面に赤色顔料
16-4	10	北トレンチ東側	蓋形	1mm前後の砂粒をやや含む	良好	暗茶褐色	外面に赤色顔料
16-5	10	南西部	蓋形	1~2mm前後の砂粒をやや含む	良好	黄褐色	立ち盛り? 赤色顔料
16-6	10	南西部	板形	1mm前後の砂粒をやや含む	良好	暗茶褐色	立ち盛り?
16-7	11	東トレンチ南側	家形	1~2mm前後の砂粒を密に含む	やや良好	暗茶褐色	線刻部
16-8	11	東トレンチ北側	家形	3mm前後の砂粒をやや含む	良好	黄褐色	全体部、赤色顔料
16-9	11	東トレンチ北側	家形	1~2mm前後の砂粒をやや密に含む	良好	明褐色	線部、わずかに赤色顔料
16-10	11	主体部埋土	家形	1~2mm前後の砂粒をやや密に含む	良好	明褐色	基部、わずかに赤色顔料
16-11	11	南西部	家形	1~2mm前後の砂粒をやや密に含む	良好	茶褐色	基部、赤色顔料
17-1	11	北東トレンチ南		1~6mm前後の砂粒をやや密に含む	良好	黄褐色	線刻1本
17-2	11	東トレンチ南		1mm前後の砂粒を少量含む	良好	黄褐色	線刻1本
17-3	11	東トレンチ南		2mm前後の砂粒をやや密に含む	良好	黄褐色	線刻1本
17-4	11	東トレンチ南		2mm前後の砂粒を含む	良好	黄褐色	線刻1本
17-5	11	南東トレンチ		1mm前後の砂粒をやや含む	良好	黄褐色	線刻1本
17-6	11			1mm前後の砂粒をやや密に含む	良好	外面:褐色 内面:暗褐色	線刻1本、外面に赤色顔料
17-7	11	南東トレンチ		3mm前後の砂粒を少量含む	良好	黄褐色	線刻1本
17-8	11	東トレンチ南		2~7mm前後の砂粒をやや含む	良好	黄褐色	線刻1本
17-9	11	東トレンチ		1~2mm前後の砂粒をやや含む	良好	外面:黄褐色 内面:茶褐色	線刻1本
17-10	11	西東トレンチ		1mm前後の砂粒をやや含む	良好	黄褐色	線刻1本、外面に赤色顔料
17-11	11	東トレンチそば		1~3mm前後の砂粒を含む	良好	黄褐色	線刻2本、外面に赤色顔料
17-12	11	南東出部基部		2mm前後の砂粒を密に含む	良好	黄褐色	線刻2本
17-13	11	東トレンチ南		1mm前後の砂粒を含む	良好	黄褐色	線刻2本、外面に赤色顔料
17-14	11	東トレンチ		1mm前後の砂粒をやや含む	やや不良	明黄褐色	線刻2本
17-15	11	東トレンチ南		1mm前後の砂粒をやや含む	良好	黄褐色	線刻2本、外面に赤色顔料
17-16	11	南東部		1~3mm前後の砂粒を含む	良好	黄褐色	線刻2本
17-17	12	南東部		1mm前後の砂粒をやや含む	良好	暗茶褐色	線刻2本、外面に赤色顔料
17-18	12	南東出部基部		1~2mm前後の砂粒を含む	良好	黄褐色	線刻多数、小孔あり
17-19	12			1mm前後の砂粒をやや含む	良好	暗茶褐色	線刻多数、外面に赤色顔料
17-20	12	東トレンチ北側		1~2mm前後の砂粒をやや含む	良好	黄褐色	線刻多数
17-21	12	北トレンチ東		2~3mm前後の砂粒をやや含む	良好	暗茶褐色	線刻多数、外面に赤色顔料
17-22	12	東トレンチ北側		1~2mm前後の砂粒をやや含む	良好	暗茶褐色	線刻多数
17-23	12	東トレンチ南側	板形	1~7mm前後の砂粒をやや含む	良好	黄褐色	線刻多数、赤色顔料

標号	図版	出土地点	種別	胎土	焼成	色調	備考
17-24	12			1~2mm前後の砂粒を含む	良好	明黄褐色	円形穿孔
17-25	12	南西部		2mm前後の砂粒を少量含む	良好	黄褐色	三角形(?)穿孔
17-26	12	北トレンチ南側		1~2mm前後の砂粒を含む	良好	明黄褐色	径約2.8cmの円形穿孔
17-27	12	南東部		1~2mm前後の砂粒をやや含む	良好	黄褐色	円形穿孔
18-1	13			1~2mm前後の砂粒を含む	良好	外面:明黄褐色 内面:明褐色	径6.0cmの円筒状
18-2	13			1~2mm前後の砂粒をやや含む	良好	外面:黄褐色 内面:茶褐色	小孔を穿つ
18-3	13	南東部		4mm前後の砂粒を少量含む	良好	外面:黄褐色 内面:黄褐色	直径5.4cm
18-4	13	南トレンチ東		2~3mm前後の砂粒をやや密に含む	良好	明黄褐色	
18-5	13	北トレンチ		1~2mm前後の砂粒をやや密に含む	良好	茶褐色	
18-6	13	南トレンチ南		2mm前後の砂粒を含む	良好	黄褐色	赤色顔料
18-7	13	南東部		1mm前後の砂粒をやや密に含む	良好	黄褐色	直径19.4cm、縁起あり
19	巻頭2	南東部	周形	2~5mm前後の砂粒を含む	良好	明黄褐色	一筋欠損
20-1	14		糸	2~5mm前後の砂粒をやや密に含む	良好	明黄褐色	
20-2	14		輪紋	1mm前後の砂粒を含む	良好	黄褐色	
20-3	14		障泥	2mm前後の砂粒を含む	良好	明黄褐色	端部
20-4	14		器	1mm前後の砂粒を含む	良好	黄褐色	
20-5	14		糸	1mm前後の砂粒を含む	良好	明黄褐色	
20-6	14		糸	1mm前後の砂粒をやや含む	良好	黄褐色	
20-7	14		糸	1mm前後の砂粒を含む	良好	黄褐色	
20-8	14		糸	1mm前後の砂粒を含む	良好	黄褐色	
21-1	巻頭3		甲冑形	1~2mm前後の砂粒をやや密に含む	良好	外面:黄褐色 内面:明黄褐色	前面欠損、赤色顔料
21-2	14	南東部	糸	1mm前後の砂粒を含む	良好	黄褐色	赤色顔料

第4表 土器観察表

標号	図版	出土地点	口径(cm)	底径(cm)	胎土	焼成	色調	備考
22-1	15	主体部前面 横断面	34.0	27.2	細砂粒を含む	良好	青灰色	断面、表面で1層部は 北西トレンチ機から出土した
22-2	15	北トレンチ東 内溝底土中	19.7		1~2mm前後の砂粒をやや含む	堅緻	外面:黄灰色	開口縁部、底縁部がかかる
22-3	15	表面	14.9		1~3mm前後の砂粒を 少量含む	堅緻	内外共に 基灰~灰灰	釜形、唇高26.0cm、胴部最大径20.4cm
22-4	15	東トレンチ北 黒色土中			1mm前後の砂粒をやや密に含む	緻緻	暗青灰色	底の破片
22-5	16	南トレンチ 黒色土中			0.5mm前後の砂粒を含む	堅緻	外面:黄灰色	底の破片
22-6	16	東トレンチ北			1mm前後の砂粒を 少量含む	堅緻	暗灰色	底の破片、内面は同心円文
22-7	16	東トレンチ北			精良	緻緻	外面:灰色 内面:明灰色	底の破片、内面は同心円文
22-8	17	主体部前面 縦断面	14.5		1mm前後の砂粒をやや含む	やや不良	黄褐色	土師器の1層部
22-9	17	主体部前面			1mm前後の砂粒を含む	良好	茶褐色	土師器の1層部
22-10	17	横断面 黒色土中		16.0・16.8	0.5~1mm前後の 砂粒を密に含む	良好	黄褐色	土師器の1層部、底縁部、 穿孔がみつかる
22-11	17	底面			1mm前後の砂粒を含む	良好	茶褐色	後世の原形器に似る

第3章 考察

第1節 円筒埴輪

円筒埴輪はその形態や製作技法等を整理することにより、古墳の時期決定や製作者集団の動向等を検討する上で有効な資料となる。猫追1号墳でも円筒埴輪片が多数出土しているが、残念ながら形態が不明なものが多い。

猫追1号墳出土の円筒埴輪の主だった特徴を整理すると、

- ①口縁部 i) 短く外反する ii) やや外反する iii) ほぼ直立する
- ②色調 i) 黄褐色 ii) 暗茶褐色 iii) 橙褐色
- ③黒斑はない(窯窯焼成)
- ④外面に丹塗り
- ⑤外面調整はタテハケ(ヨコハケはない)
- ⑥透孔は円形(?)
- ⑦突帯は3条以上
- ⑧突帯断面 台形(上下端部に若干稜がみられる)、一部三角
- ⑨法量は口縁部・底径・胴径の大きさにより、三つに分類できる

この他には、突帯間隔設定技法^⑪の痕跡である凹線が突帯の下に確認できたこと、また底部切り離しの棒状工具の痕跡が認められたことが特筆できる。

特に色調については、黄褐色が大部分を占めるものの大きく3つに分けることができ、少なくとも3回の焼成機会があったと考えられる。詳しくは見えていないが、法量や口縁部形態も3つに大別できる可能性がある。製作者単位の復元が期待できるので、技法と形態との対応など今後の課題としたい。

猫追1号墳の円筒埴輪については、赤色顔料の塗布や口縁端部の形状などから川西編年Ⅳ期^⑫、すなわち窯窯焼成でも早い段階に位置づけられると考えられている^⑬。田川地域における円筒埴輪の出土例については、セスドノ古墳^⑭、大任町狐塚1号墳^⑮などが挙げられる。セスドノ古墳は猫追1号墳に近接するが、円筒埴輪の趣きは異なっている。突帯は両者とも鋭いものの、猫追1号墳の胴径22~26cm、厚さ1.0~1.5cm(両者とも平均値)に対して、セスドノ古墳は胴径15~17cm、厚さ0.8~1.0cm前後と、視覚的・触覚的にかなり異なっており、明らかに製作者集団が異なっている。またやや時期が降るが、狐塚1号墳の円筒埴輪は、分厚い底部に残された太目の棒状工具での雑な切り離しが特徴的である。田川地域における円筒埴輪の資料はまだまだ少ないが、遠賀川流域および周防灘沿岸部の資料と総合的に検討する必要が今後であろう^⑯。

第2節 形象埴輪

猫追1号墳から出土した形象埴輪は、馬形・甲冑形・蓋形・家形・盾形と形状不明なものがある。蓋形・家形・盾形は出土位置が判然としないが、馬形・甲冑形埴輪については南側突出部の基部でまとまって出土しており、原位置が復元可能である。ここでは馬形・甲冑形埴輪のほかに、円筒・朝顔形埴輪、及び形状が不明な形象埴輪（第18図-7など）も設置されていたようである。出土状況から、馬形埴輪の視線の先には石室があったようだ。いずれにせよ猫追1号墳の形象埴輪は、従来の器財埴輪のセットに、馬や顔の表現がある甲冑形などの新しい要素が出現した段階のものである。

今回出土した馬形・甲冑形埴輪については、これほどまとまったものは九州では少なく貴重な資料となった。馬形埴輪は胴長短足の小型馬で、顔骨や背骨の隆起、蹄や腹、生殖器の表現など細部にわたって実物に忠実である。透孔が尻部に一孔のみなもの、写実性を追及した結果だろう。これは馬をみた経験がないと作れる代物ではない。鞍が本体と別個に製作されたことから、馬を初めてみた埴輪工人の素直な作り方がうかがわれる。馬具も鞍・障泥・輪鍔・轡（轡轡）など乗馬に実用的な組み合わせのみであるので、5世紀代における初現期の特徴をよく表しているといえる。ただ、タテガミの表現や脚部の太さなど埴輪特有の表現もみられることから、馬形埴輪製作にあたっての基準が少なからずあったようだ。日本列島における馬形埴輪の初現例としては、大阪府古市古墳群の野中宮山古墳（5世紀初頭）や春日御前山古墳（5世紀前半）などのものが知られているが、これらと比較しても目の形状や頭部の形態など異なる点が多く、今後はこの埴輪工人の集団がどの系統と関わりがあったかが課題となる。また、赤色顔料を塗布した甲冑形埴輪とともに川土しているため、器財的な意味を持っていたと考えられる。近年増加している馬を供献や殉葬させた事例のように¹⁹⁾、この猫追1号墳出土例についてもいわば犠牲獣の代物と考えられる。事例が少ない生殖器の表現であるが、増殖種すなわち良馬を供養していたことだろう。

甲冑形埴輪は前面が欠われており、残念ながら顔や冑の群細は不明である。しかしながら、顔の痕跡が一部残されており、甲冑形埴輪に顔や手足の表現が加わって人物埴輪になる過渡期のものといえよう。猫追1号墳の甲冑形埴輪は肩庇付冑と三角板革綴短甲のセットと推測されるが、三角板革綴短甲に肩庇付冑が共存する例は大阪府御薮塚古墳第2主体部（TK73段階）、福岡県においては肩庇付冑の上限とされる月岡古墳（TK216段階）で三角板革綴短甲・三角板銀留短甲と共存する。また、九州における甲冑形埴輪は破片資料が多く全体の形状がわかるのは非常に少ないが、宮崎県西都原171号墳（川西編年Ⅱ期）で三角板革綴短甲を模した埴輪が、おそらくは衝角付冑である冑とともに出土している。猫追1号墳の甲冑形埴輪は前面が失われ地板の表現がなく、いまいちモデルとなった甲冑がわからないが、少なくとも銀留技法導入前後の時期のもの、すなわち西都原171号墳の直後に続くと考えられる。

その他の形象埴輪としては、蓋形埴輪の笠部が部分的に判明している。突帯の付き方は宮崎県西都原171号墳出土例に近く、線刻のあり方は福岡県欠塚古墳例（TK208～TK23）のように、二条一単位としたものが数単位、笠部二段に施されているようである。ただし、欠塚例は笠部を線刻により二分しているが猫追例は突帯により二分しているので、古い様相を残す。

猫追1号墳の形象埴輪は、横穴式石室導入などに伴う朝鮮半島からの波が、これまでの古墳祭式に影響を及ぼし始める時期のものであるといえる²⁰⁾。

第3節 田川地域における古墳時代中期の様相―猫迫1号墳の位置づけ―

猫迫1号墳の調査により判明した多くの新知見は、初期横穴式石室、馬形・甲冑形埴輪、須恵器研究において重要な意味を持ち、また朝鮮半島と、田川あるいは日本列島との関係を橋渡しする貴重な資料となった。

以前、石室・埴輪（円筒・形象）・須恵器から、猫迫1号墳の意義について検討した¹⁰⁹⁾。要点のみまとめると、

（石室）セスドノ古墳と同様特異な構造で、板石を立てその隙間に割石を小口積みして壁体を構築する方法を採用しつつも、玄門部に大型の板石を立てて袖石とする形態をとっている。楣石を持ちながらも前壁は形成していない玄門部の特徴などから、時期的には前原市釜塚古墳や若宮町竹原八幡塚古墳などに後出すると考えられる。

（円筒埴輪）円筒埴輪は一見すると、無黒斑でタテハケ調整であることから川西編年Ⅴ期のように見えるが、赤色顔料の塗布、口縁部端部を直角に近く外反させることなどの特徴から川西編年Ⅳ期の中でも古い段階、つまり窯窯焼成の初期の段階と考えられる。

（形象埴輪）馬形埴輪は顔や蹄の作り、鞍が別作りであること、透孔が尻部に一孔であることなどの諸特徴によって初期のものであることがわかる。甲冑形埴輪は肩庇付冑と三角板革綴規甲のセットからTK73段階前後のものと考えられる。

（須恵器）壺の肩が張る特徴、器台の高さが低く、杯部の深さが深く、脚部の高さと近いこと、そして無文でハケメ調整であること、甕の口縁端部が尖ることなどの特徴から、生産地はわからないが、TG232・231～TK73段階前後のものと考えられる。

以上より猫迫1号墳は、TK73段階を中心とした時期の特徴を有していると考えられる。

猫迫1号墳のより詳しい位置付けについては、本書で報告した資料のもと、多くの方々によって検討がなされれば幸いである。これら一連の課題は後日に委ねることにして、ここでは田川地域における猫迫1号墳の位置づけ、特に近接するセスドノ古墳と比較することで、田川地域における古墳時代中期の様相を把握したい。

セスドノ古墳は猫迫1号墳の約180m北西に所在し、田川地域における古墳時代中期の首長墓系列である。墳丘径37mに幅5mの周溝、さらに外側には周堤を巡らす大型円墳であり、昭和43年に実施された発掘調査では、未盗掘であった石室から多くの副葬品が出土している。石室の構造は初期横穴式石室で、北部九州においては特異なものとされていたが、猫迫1号墳の調査により国内でも類例が増えたことになる。猫迫1号墳とセスドノ古墳の石室の相違点をみてみると、第5表のとおりとなる。

猫迫1号墳とセスドノ古墳は類似する石室構造であるが、細部をみると相違する点がいくつかみられる。両者の石室に大きな特徴として、天井まで届くような大きな板石を側壁に用いるという構築方法がある。このような特徴は国内では見られず、韓国大邱市達西古墳群¹¹⁰⁾と酷似しており、その技術的影響が指摘されている¹¹¹⁾。しかしながら、猫迫1号墳・セスドノ古墳のような板石による突出した袖石は達西古墳群中にはみられず、この点は北部九州における初期横穴式石室と共通した構造となっている¹¹²⁾。セスドノ古墳は両側壁とも板石3枚と左右対称に対して、猫迫1号墳は左側壁には板石1枚、右側壁に2枚と対称的ではない。また、猫迫1号墳は袖石にそのまま楣石を掛

第5表 猫迫1号墳・セストノ古墳の比較

	玄室 形態	開口 方向	赤色 顔料	左側壁	右側壁	奥壁	玄門	玄門 部段	羨道	壁
猫 迫 1号墳	長方形 1:1.4	N80°W	あり	板石 1枚	板石 2枚	板石 1枚	両袖 前壁なし	あり	未発達	持ち 送り
セストノ 古 墳	長方形 1:1.8	N78°W	あり	板石 3枚	板石 3枚	板石 2枚	両袖 前壁あり	あり	未発達	直立

け渡し前壁は構築されないと復元されるが、セストノ古墳は袖石に割石を積み上げて前壁を構築している。奥壁についても猫迫1号墳は板石1枚を腰石として上半分は割石を積むのに対し、セストノ古墳は大きな板石を2枚使用し、隙間を割石で充填する程度である。なお、猫迫1号墳は壁をやや持ち送るが、セストノ古墳はほぼ直立する。

このように、猫迫1号墳とセストノ古墳については特徴的な側壁構造で共通しているものの、細部にわたっては微妙に異なっている。これらの違いの大きな要因の一つに時期差が考えられるが、猫迫1号墳とセストノ古墳では石室玄門部の構造などから、猫迫1号墳の方がセストノ古墳より古く位置付けられる。また、セストノ古墳からは横切板鉄留短甲が出土しているが、猫迫1号墳出土の甲冑形埴輪が三角板革綴短甲をモデルにしているとすると、セストノ古墳は明らかに後続する。猫迫1号墳の時期については未だ議論の余地があるが、少なくとも相対的には、セストノ古墳に先行するものと考えられる。

ここで古墳の規模についてみると、猫迫1号墳は径約27.2mの円墳に造り出しがつくのに対し、セストノ古墳は墳丘径37mと大きい。玄室プランはセストノ古墳の方が猫迫1号墳より長方形に近く、規模についても若干セストノ古墳が大きい。したがって、時期が降るセストノ古墳の方が、猫迫1号墳よりもやや上位になると考えられる。

田川地域における古墳時代の首長墓の動向を概観すると、前期の前方後円墳である位登古墳が所在する中元寺川西岸から、中期になると彦山川東岸の猫迫1号墳、セストノ古墳に移るようである。首長墓系列が移行した理由は、両者の特異な石室構造、馬形埴輪・甲冑形埴輪、武器・武具などから容易に推測できるように、朝鮮半島、中でも加耶地域との交渉を背景にしていると考えられる。また、猫迫1号墳とセストノ古墳の開口方向がほぼ同じなのは示唆的で、共通する石室構造とともに、同族関係にあるものと推測される。加耶地域との交渉によって萌芽した猫迫1号墳の勢力は、その交渉経路とともに継承した次世代のセストノ古墳により、田川地域における確固たる首長としての地位を築いた。北部九州における5世紀代の首長の姿は、畿内に従属する一方で朝鮮半島との独自のパイプを持っているという二面性がしばしば指摘されるが⁽¹³⁾、猫迫1号墳も同様なことが指摘される。

しかし、数十年ほど続いた彦山川東岸地域の優位も長くは続かなかった。猫迫1号墳やセストノ古墳のような特徴的な石室は単発的で終焉を迎えた。以降田川地域における首長墓系列は夏吉古墳群に移るようであるが、猫迫1号墳の被葬者によってもたらされた朝鮮半島とのパイプは、香春岳に至り来た新羅神などのように、その後も活用されるようである。田川地域に残された渡来人の足跡は、猫迫1号墳の被葬者によりその第一歩が刻まれたのである⁽¹⁴⁾。

【註】

- (1) 辻川哲郎 2003「突帯・突帯間隔設定技法を中心として」
『埴輪・円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析』第52回埋蔵文化財研究会発表要旨集 など
- (2) 川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2、3
- (3) 亀田修一・田代健二・重藤輝行・岸本圭・福本寛 2003「田川市猫追1号墳の検討」
『古文化談義』50（下）
- (4) 佐田 茂穂 1984『セストノ古墳』田川市文化財調査報告書第3集 田川市教育委員会
- (5) 橋口達也 1976『狐塚古墳群』大任町文化財調査報告書第1集 大任町教育委員会
- (6) 円筒埴輪については、以下の文献を参照している。
九州前方後円墳研究会 2000『第3回九州前方後円墳研究会資料集 九州の埴輪その変遷と地域性』
埋蔵文化財研究会 2003『埴輪・円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析』
第52回埋蔵文化財研究会発表要旨集
- (7) 桃崎祐輔 1999「日本列島における騎馬文化の受容と拡散」
『第46回埋蔵文化財研究会 渡来人の受容と展開』第46回埋蔵文化財研究会実行委員会
- (8) 形象埴輪については、以下の文献を主に参照した。
井上裕 1985「馬形埴輪の研究―製作技法を中心として―」『古代探叢Ⅱ』早稲田大学出版部
1995「馬形埴輪の研究―画期の設定―」『古代探叢Ⅳ』早稲田大学出版部
齊藤香織 1995「馬形埴輪における製作技法の変遷と地域性」『国家形成期の考古学』
大阪大学考古学研究室
高橋克壽 1992「2埴輪の種類と編年―2 器材埴輪」『古墳時代の研究 9 古墳 Ⅲ 埴輪』雄山閣
若松良一 1992「2埴輪の種類と編年―3 人物・動物埴輪」『同上』雄山閣
森田克行 1992「動物埴輪のスカシ孔―畿内型と武蔵型」『究班』埋蔵文化財研究会
松木武彦 1992「蓋形埴輪の型式と範型」『同上』埋蔵文化財研究会
国立歴史民俗博物館 1999『はにわ人は語る』
- (9) 前掲（3）
- (10) 小泉顕夫・野守健 1931「慶尚北道達城郡達西面古墳発掘調査」
『大正12年度古蹟調査報告』第1冊
- (11) 森下浩行 1987「九州型初期横穴式石室考―畿内型出現以前横穴式石室の様相―」
『古代学研究』115
- (12) 前掲（3）
- (13) 北九州市立考古博物館 1989『五世紀の北九州』
- (14) 亀田修一 2004「豊前西部の渡来入―田川地域を中心として―」
『福岡大学考古学論集―小田富上雄先生退職記念―』

第4節 田川地域の旧石器文化

1. はじめに

筑豊東部の田川市域を中心とする田川盆地は、彦山川水系に属する。本来は、河川侵食による段丘あるいは丘陵状の地形が形成されていたと考えられる。ただし、後世の開発による地形改変が大きく、旧地形を把握することは困難である。それでも発掘調査や遺跡踏査活動等により、幾つかの旧石器資料が蓄積されてきた。今後、このような資料を総合的に位置づけ、当地域の歴史叙述を行っていく必要がある。

2. 旧石器時代遺跡の概要

寺ノ上遺跡（第25図1～3）

田川市禰宇寺ノ上に所在する。遺跡は、彦山川と金辺川の合流する付近の河岸段丘上に立地する。弥生時代遺跡の調査が行われているが、旧石器、縄文時代の遺物は植木忠氏によって採集されている。これらの資料の大半は、長谷川清之氏（長谷川1989）、高橋慎二氏（高橋2001）によって報告されている。1は縦長剥片を素材とする二側縁加工のナイフ形石器である。端部を斜め整形する。ホルンフェルス製。2は縦長剥片素材材の二側縁加工のナイフ形石器である。頁岩製。3は、先端部を大きく欠損する。厚手の幅広剥片を急傾斜調整によって整形し、素材縁辺を残し切り出し状に仕上げる。AT降灰後に出現する麁谷型ナイフ形石器である。黒曜石製。

猫迫1号墳（第24図2～4）

田川市伊田字猫迫に所在する。遺跡は、上伊田台地上に立地している。墳丘周辺部から出土・採集されており、古墳下位に遺物包含層が存在すると考えられる。出土資料には、ナイフ形石器、翼状剥片、二次加工剥片がある。ナイフ形石器は自然面を残す横長剥片を素材とする。素材剥離面と調整の切り合いは微妙だが、基部調整からナイフ形石器と理解した。翼状剥片は作業面が一面あり、打面部がジグザグに後退するが、底面の剥離方向等、基準を満たしている。県内で確認されている中でも技術的純粋性を保っており大型である。石核などは出土していない。肉眼観察では、小城地域のサヌカイトに酷似する。

五徳畑ヶ田遺跡（第25図4）

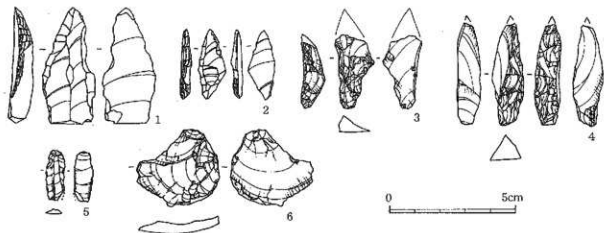
田川郡香春町大字五徳字畑ヶ田に所在する。遺跡は、五徳川沿いの低丘陵の落ち際に立地している。弥生時代の大規模集落が調査されている。資料は、再整理の際に確認された。比較的厚みを持った横長剥片素材のナイフ形石器である。主要剥離面と作業面の剥離方向は一致しない。背部調整により断面三角形に仕上げられる。先端部を欠損し、風化、摩滅が著しい。針尾淀姫系黒曜石を使用している。

湯無田遺跡（第25図5～7）

田川郡香春町大字中津原字湯無田に所在する。丘陵先端部の谷際に立地する。調査では縄文時代中期の土坑や中世の建物が確認されている。資料は、近世墓中より出土した。細石刃、剥片類が出土している。5の細石刃、6の不定形剥片は同一の墓より出土している。いずれも、針尾淀姫系黒曜石で、同時期と考えられる。

3. 田川地域の旧石器文化に関する予察

取り上げた資料はいずれも現位置遊離資料である。大きくナイフ形石器、細石刃文化期に分かれ



第25図 田川地域の旧石器資料実測図 (2/3)

る。また使用石材として、西北九州産黒曜石、サヌカイト、ホルンフェルス、珪質頁岩がある。これらのうち、西北九州産石材を使用する石器群は、AT降灰後のナイフ形石器文化後半～細石刃文化に比定される。これに対し、ホルンフェルスと珪質頁岩を使用する寺ノ上遺跡のナイフ形石器は、先端部の斜め整形や切り出し状に近い形態である。これらは、九州地方におけるAT降灰前後のナイフ形石器の特徴を示している。また多少時期が下る可能性もあるが、狸谷型ナイフ形石器が検出されている。以上のことから、寺ノ上遺跡資料はAT降灰前後の所産と考えられる。

本地域のAT降灰後の石器群として、瀬戸内技法に代表される翼状剥片、横長剥片素材のナイフ形石器がある。いずれも西北九州産黒曜石、サヌカイトを使用している。猫迫1号墳の翼状剥片は技術的には純粋な形を保持している。五徳畑ヶ畑遺跡跡の横長剥片素材のナイフ形石器は、瀬戸内技法盛行以後の所産と考えられる。これらの資料は、瀬戸内技法の広がり、変容を考える上で無視できない。特に、瀬戸内技法の発生が近畿地方と考えられる研究の現状では、その九州地方への波及ルートが問題となっている（吉留2001）。従来、山国川、関門海峡ルートなどが想定されてきたが、彦山川、遠賀川を介したルートも想定可能となったと言える。また高橋懐二氏によって問題提起されてきたが、当地域の石材利用がAT降灰後に在地系石材から西北九州産石材への利用拡大は、九州旧石器時代の石材利用を考える上でも重要である。

4. おわりに

以上、田川地域の旧石器時代資料について検討を行ってきた。これまで不明な点が多かった同地域の石器群は、他地域と同様の変遷を持つ可能性が高いことを確認できた。また、福岡中央という本地域の地理的特徴についての特質も指摘できた。今後、良好な旧石器包含層が残っていると考えられる、香春町～田川市、赤村周辺での層位の調査や踏査に期待したい。

【参考文献】

- 杉原敏之編 2003『湯無田遺跡』福岡県文化財調査報告書第180集 福岡県教育委員会
高橋懐二 2002『田川地域の旧石器時代資料』『福岡考古』20号 福岡考古懇話会
野村憲一編 2002『五徳畑ヶ畑遺跡Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区（概報）』
香春町文化財調査報告書第11集 香春町教育委員会
長谷川清之 1989『田川市楠 植木忠氏資料の紹介（その1）』『郷土田川』32号
吉留秀敏 2001『筑紫野地域における瀬戸内技法関連資料の評価』『筑紫野市史』資料編

第4章 まとめ

平成11年度に確認調査を実施した猫迫1号墳については、今回ようやく遺物の報告をするに至った。セスドノ古墳に連なる首長墓とされた古墳からは、日本でも最古級の馬形埴輪と九州でも類例の少ない甲冑形埴輪を出土し、一躍九州埴輪研究の一級資料となった。また、セスドノ古墳に類似する石室構造や初期須恵器は、朝鮮半島からの影響が直接、あるいは間接的に田川に波及してきた過程をうかがい知れる資料として重要となった。猫迫1号墳については、初期横穴式石室研究、馬形・甲冑形埴輪研究、初期須恵器自体の研究、その副葬などの儀礼研究などにおいて極めて重要な意味を持つと考える。

時代はさかのぼるが、古墳から採集された翼状剥片も重要な資料である。従来、田川地域では旧石器資料が皆無に等しかったが近年では資料数も増え、その実像に迫ることが可能となりつつある。

猫迫1号墳については平成11年度に概要報告がなされて以降、遺物の整理が進むにつれて、馬形・甲冑形埴輪の全容も明らかとなり、その重要性も認識されるようになった。ようやく今回遺物も報告することができ、馬形埴輪もより多くの方々に周知されることが期待される。そうして今後、5世紀代の研究に一助となることができたら幸いである。今回時間の都合により十分な検討ができなかったが、いずれ改めて検討したいと考えている。

最後になりましたが、猫迫1号墳の発掘調査から報告書刊行に至るまで、多くの方々にご協力、ご指導を賜ることができました。心より感謝申し上げます。

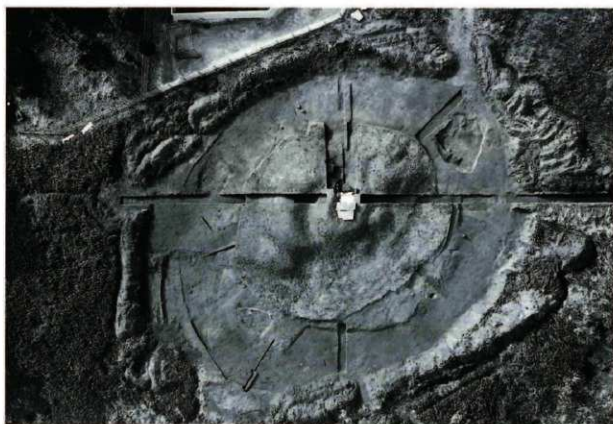


現地説明会の様子

圖 版



猫迫 1 号墳遠景



猫迫 1 号墳全景



墳丘（調査前）



天井石（調査前）



北側周溝土層断面



南突出部壇輪出土地点



南東突出部（北から）



南突出部（西から）



周溝完掘状況（北側）



北トレンチ周溝検出状況



南トレンチ墳丘部



北トレンチ遺構検出状況



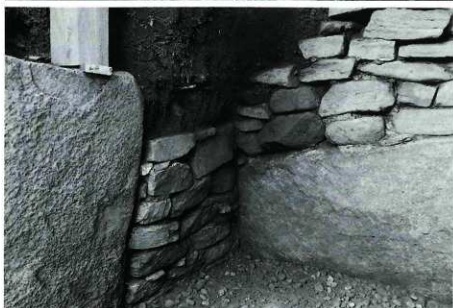
石室前庭部土層横断面



石室前庭部土層縦断面



石室左側壁



石室左奥隅

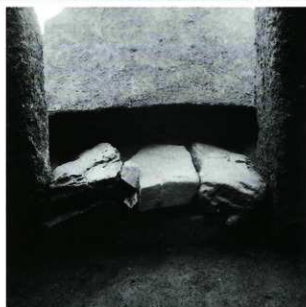


石室右側壁

石室玄門部



石室玄門階段状部



石室床面





閉塞石

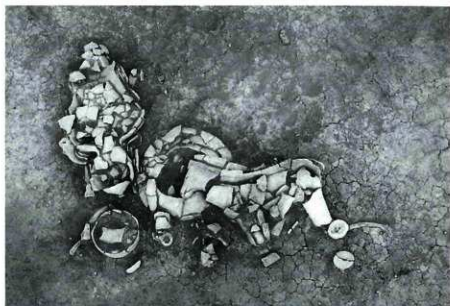


狭道部右側壁



天井石復元状況

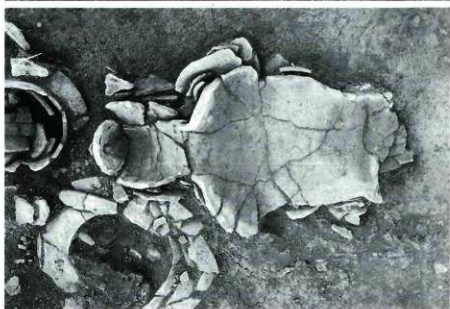
形象埴輪出土状況



馬形埴輪出土状況



甲冑形埴輪出土状況





11図-4



14図-45



14図-46



11図-1



14図-47



13図-29



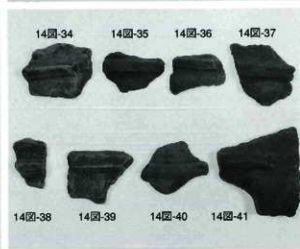
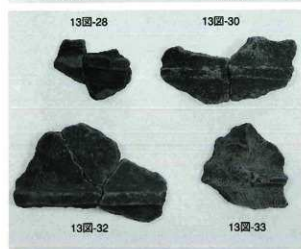
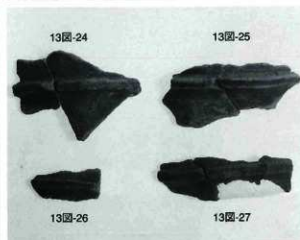
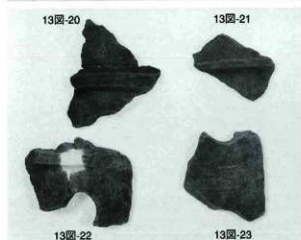
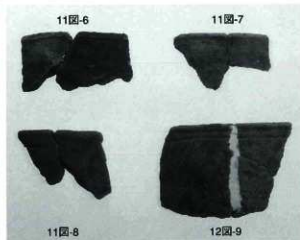
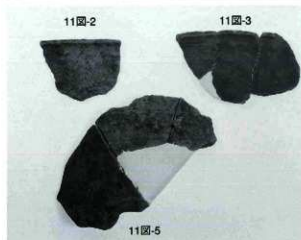
14図-48



13図-31

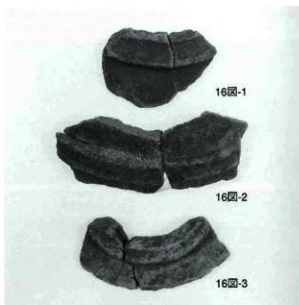


14図-49





15図-1



16図-1



16図-2



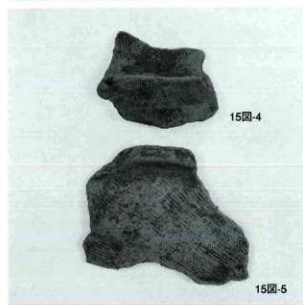
16図-3



15図-2



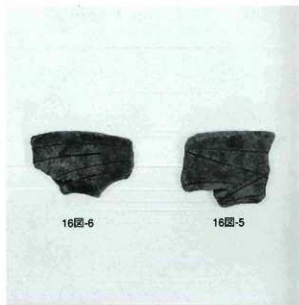
16図-4



15図-4



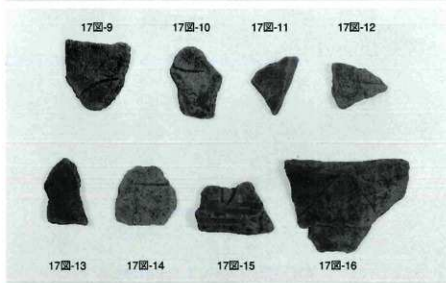
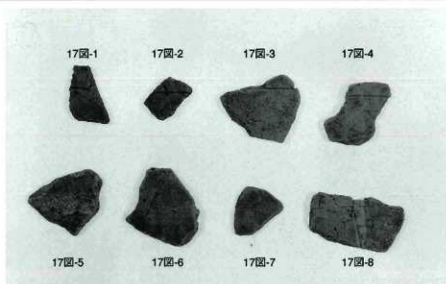
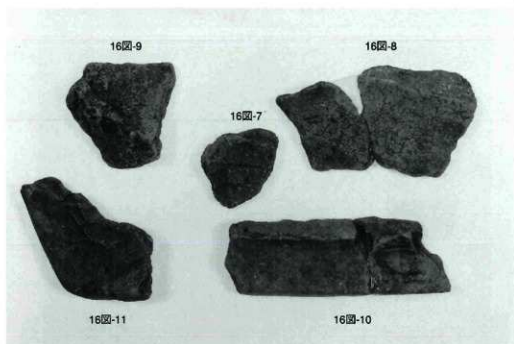
15図-5



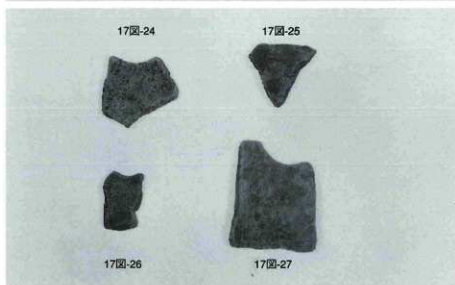
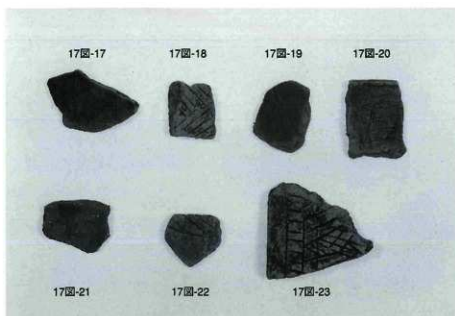
16図-6



16図-5



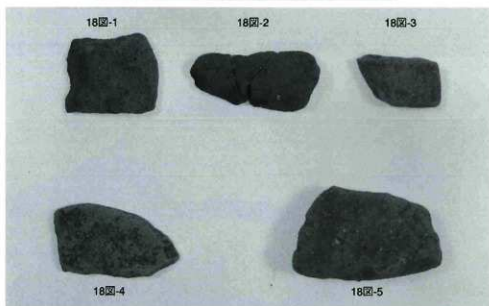
家形埴輪・線刻のある埴輪



線刻・透孔のある埴輪・円筒埴輪

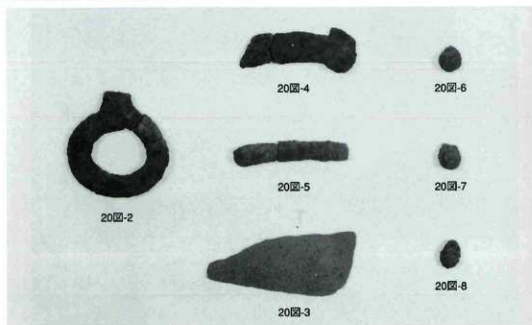
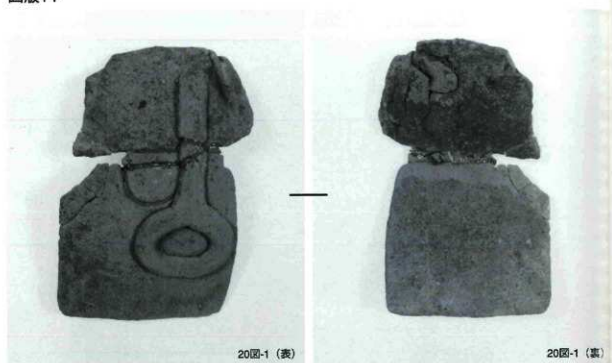


18圖-7



18圖-6

形象埴輪



馬形埴輪馬具・甲冑形埴輪ベルト



22図-1口縁



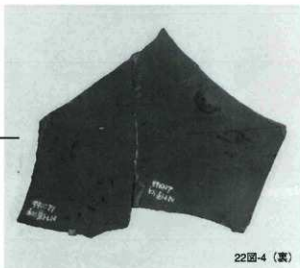
22図-1



22図-3



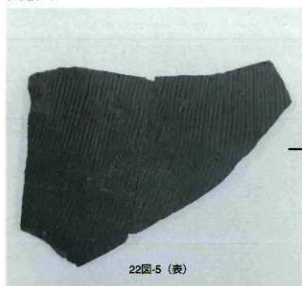
22図-4 (表)



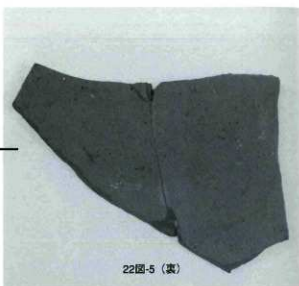
22図-4 (裏)



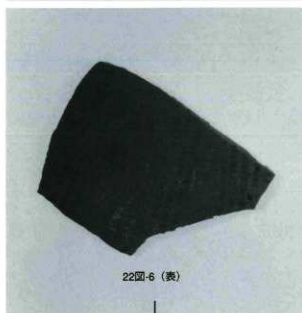
22図-2



22図-5 (表)



22図-5 (裏)



22図-6 (表)



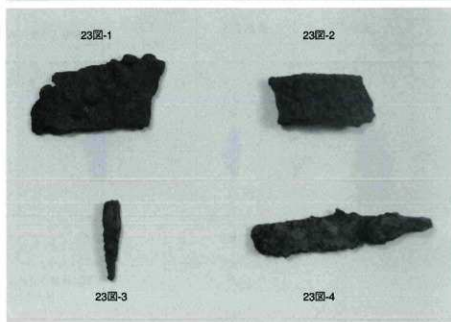
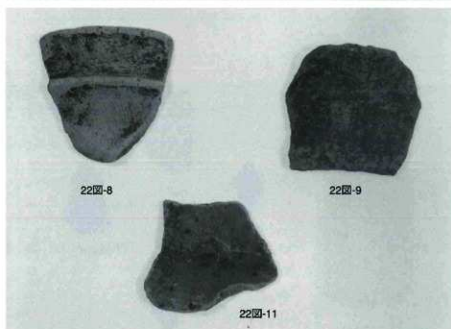
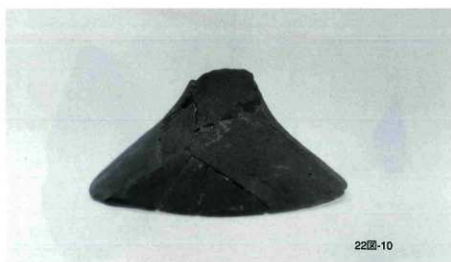
22図-7 (表)



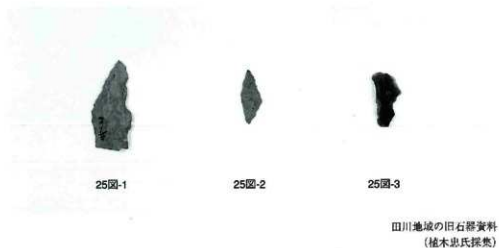
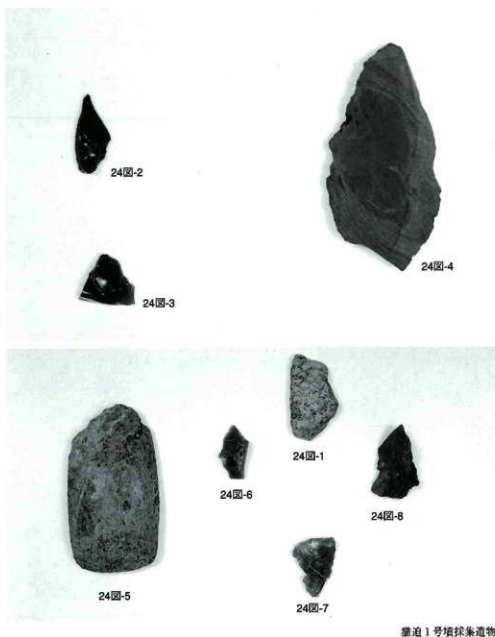
22図-6 (裏)



22図-7 (裏)



土師器・鉄器



報 告 書 抄 録

ふりがな	ねこきこいちごうふん							
書名	猿迫1号墳							
副書名								
巻次								
シリーズ名	田川市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第11集							
編著者名	福本 寛							
編集機関	田川市教育委員会							
所在地	〒826-0031 福岡県田川市千代町6番3号							
発行年月日	2004年3月31日							
ふりがな 所収遺跡跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
ねこきこいちごうふん 猿迫1号墳	みくおかけん 福岡県 田川市 おおあざいた 大字伊田 3 8 3 8	402061	060083	33° 38' 50" 009	130° 49' 46" 244	1999.7.21 / 1999.11.25	約1,200㎡	範囲確認調査
所収遺跡跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
猿迫1号墳	古墳	古墳時代中期		造出付円墳または帆立貝式前方後円墳		円筒埴輪 形象埴輪 (馬形・甲冑形など) 須恵器 土師器 鉄器		九州でも類例の少ない古墳時代中期の馬形・甲冑形埴輪が出土した

田川市文化財調査報告書

第 11 集

猫 迫 1 号 墳

平成16年3月31日

発 行 田川市教育委員会
田川市千代町6番3号

印 刷 有限会社 川崎印刷
田川市大字伊田2713-45

